

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北太平洋沿岸における海獣猟の展開： 銚・銚頭を指標として

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山浦, 清 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00006019 |

北太平洋沿岸における海獣猟の展開

— 銛・銛頭を指標として —

山浦 清

(立教大学)

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 はじめに | 3.2 オホーツク海沿岸 |
| 2 銛・銛頭について | 3.3 ベーリング海・チュクチ海沿岸 |
| 2.1 銛・銛頭 | 3.3.1 ベーリング海峡周辺 |
| 2.2 雌型銛頭・雄型銛頭 | 3.3.2 南西アラスカ地域 |
| 3 海獣猟の地域的概観 | 3.3.3 アラスカ太平洋岸・アリュー シャン列島 |
| 3.1 極東地域 | 3.3.4 雌型銛頭の系譜 |
| 3.1.1 北海道・東北地方 | 3.4 カナダ北西海岸地域 |
| 3.1.2 西北九州から朝鮮半島・沿海 州 | 4 まとめ |
| 3.1.3 アムール川流域 | |

1 はじめに

巨視的に北太平洋沿岸諸文化を見た時、サケ漁文化とその北方に位置する海獣狩猟文化とする理解は20世紀初頭ジェサップ北太平洋調査団 (Jesup North Pacific Expedition) の報告以来、多くの研究者によって説かれてきた (Fitzhugh and Crowell 1988: 14; 渡辺 1992: 69)。すなわち北太平洋西岸においては、アイヌ、アムール川口・サハリン北部に住むニブフ、カムチャッカ半島イテリメンにおけるサケ漁の重要性は知られたところであり、一方その東岸のカナダ北西海岸インディアン (Northwest Coast Indians) ではサケ漁を基盤として階層化社会が展開したとされている (渡辺 1992: 21)。それらのさらに北、すなわちベーリング海及びベーリング海峡を越えたチュクチ海沿岸域においては冬期結氷し (図1)、そこに住むエスキモー・海岸チュクチ (Maritime Chukchi) においては、アザラシ類・セイウチさらにはクジラ類といった海獣猟を基盤とした文化が展開した。またオホーツク海においても冬季流氷が見られ、その北東岸に居住する海岸コリヤーク (Maritime Koryak) においても海獣猟は知られるところであった。もちろん上記サケ漁民とされた民族においてもなんらかの形で海獣猟がなされていた。

そうした地域では海獣狩猟具として銛 (harpoon) が使用された。その銛の先端部=銛頭 (harpoon head) の形態は多様であり、諸文化間の関係を追求する上で多くの考古学者が関心を示した (Mathiassen 1927; Collins 1937; Leroi-Gouhuran 1946)。その研究は今日に

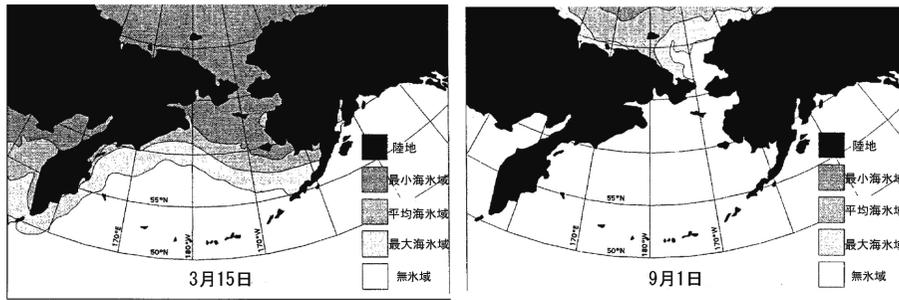


図1 ベーリング海峡辺における海氷の広がり (出典：Dixon 2003: fig.2)

においても継続されているが、本論では考古資料としてのそれら銛頭を指標として、当地域の海獣猟の成立・展開過程を追求してみることとしたい。

2 銛・銛頭について

2.1 銛・銛頭¹⁾

一般に知られる銛と^{ヤス} 獵との相違は何であろうか。考古学では「^{ヤス} 獵」はその先端部と柄 (= shaft) とが一体として使用されるのに対し、「銛」においてはその先端に取り付けられた銛頭が、柄あるいは先柄 (= foreshaft) から離れ、獲物体内に残る「離頭」という特徴があるとされている (図2)。それ故「ハナレ」という民俗呼称も存在するわけである。すなわち「^{ヤス} 獵」は一般的に理解される「槍」に近いものである。

ただ狩猟対象なる動物は必ずしも銛の一撃によって獲得することができない場合がむしろ多い。例えば捕鯨において銛を打ち打ち込んだとしても、当然その柄・先柄から外れた銛頭が打ち込まれながら鯨は逃走する。ただ鯨は血を流し、次第に弱であろう。鯨体内に入った銛頭には綱が付けられており、その他端は銛の柄、浮き袋等に繋がっている。そこで柄・浮き袋等は抵抗体となり、同時に鯨の位置を示す標識ともなるわけである。それ故、最終的には槍を打ち込んで獲物を仕留め、鯨を確保することが可能となる。こうした使用法から分かるように、離頭その他の特性により、海獣を対象とした猟において最適な狩猟具とされることとなる²⁾。

原理的に考えるなら、^{ヤス} 獵あるいは槍の類から銛が成立したことが想定される。それは獲物に刺さったにしろ、その傷口から^{ヤス} 獵・槍自体が脱落してしまう可能性がある。それに対し、その先端部に逆刺 (barb) を付けることにより、脱落することを防ぐことも可能であるが、柄と一体となっているため、先端部と柄の接合部で折損する可能性も高いわけである。そこで先端のみが獲物体内に残るようにし、さらに先端部に紐を付け、その他端を柄に結び付けておけば、折損の可能性は減り、また柄を含めて回収することも可能性となる。こうした段階をへて、離頭性を有する狩猟用具である銛が出現したと想

定することができる。もちろんこうした理解は機械的想定とされるかもしれないが、可能性として考えておくべきであろう。各地民族誌に知られる狩猟具の比較研究において、グリーンランド東岸アマサリク (Angmagsalik) エスキモーのカヤックから投擲されるザラシ猟用鉞が最多の部品からなる最も発達した狩猟具であるとする指摘もある (Oswald 1973:150)。

2.2 雌型鉞頭・雄型鉞頭

鉞頭はその基本的形態から二分して考えるのが一般的であり、また有効である。それはルロア＝グーラン (Leroi-Gouhnan 1946: 328) の提唱に始まる「雄型鉞頭」(tête harpoon mâle)・「雌型鉞頭」(tête harpon femelle) という二分法である。図2の1は一般には逆刺付き鉞頭 (barbed harpoon head), 図2の2は回転式鉞頭 (toggle harpoon head) と呼称されている。ただ鉞頭には逆刺を有するが「回転式」とされるものもあり、また個々の鉞頭が果たして「回転」するかという疑問が提出されこともある。そうした点からルロア＝グーランの分類は明瞭であり、本論でも使用することとする。

すなわち雌型鉞頭 (図2の2) は鉞頭基部に作られた窩 (socket) に 鉞の柄あるいは先柄が差し込まれるのに対し、雄型 (図2の1) においてはその基部が柄部に差し込ま

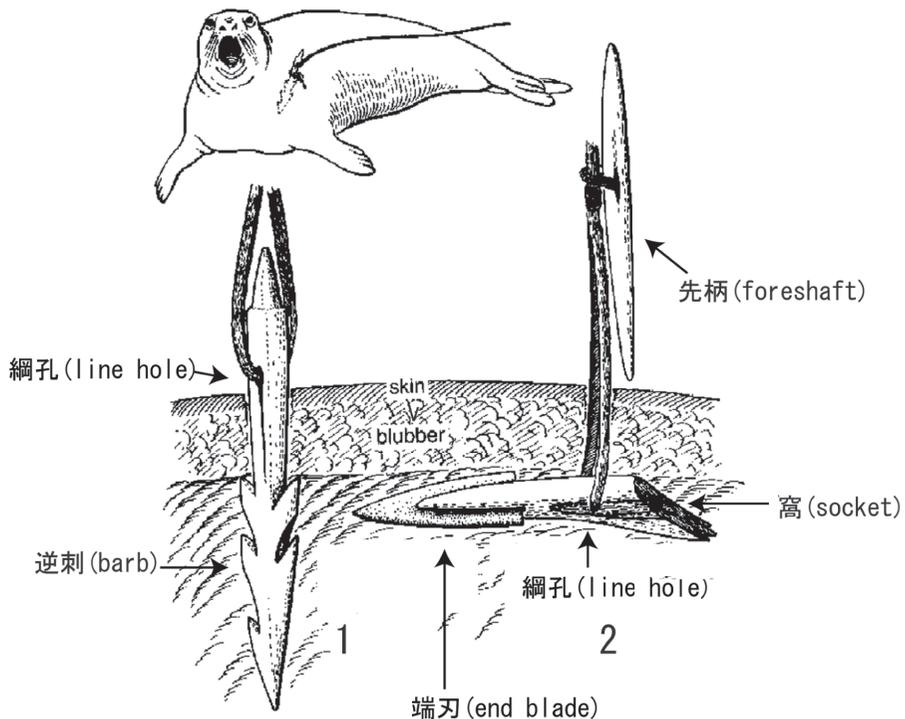


図2 雄型鉞頭 (1) と雌型鉞頭 (2) (出典: Fitzhugh and Kaplan 1982: fig.37)

れるように製作されている。また雌型銚頭においては図2の2のように、獲物体内に貫入後、脂肪 (blubber) 下で「留め木」(toggle) のようになると想定され、そこから「回転」式とも呼称されてきたわけである。つまり雌型銚頭は銚頭全体が獲物体内に貫入するように製作・使用され、図に見られるように、銚頭全体が抵抗体となって獲物体内に留まるわけである。そして銚頭の網孔 (line hole)、あるいは銚頭中央部に結び付けられた銚綱によって狩猟者は獲物を確保することとなる。また逆刺を有する雄型の場合は全体として長めとなるが、雌型は短小であるといえよう。

後述するエスキモーが行なう冬期氷原でのアザラシ類の息穴猟 (breathing hole hunting) では、雄型銚頭の場合、獲物体外に突き出ているその基部が氷に当たって破損し、アザラシは逃走してしまう可能性がある。また氷海での銚猟においても、同様の危険性があることとなる。こうした点から氷海での海獣猟においては雌型銚頭が必需品ともされることとなる。ただヨーロッパにおいては上部旧石器時代から海獣猟がなされていたが (Clark 1952: 62-90)、そこでは雄型銚頭が知られるのみであり、後期新石器時代以降に雌型銚頭が出現することとなった (山浦 2004: 287-293)³⁾。

本節最後に、以下の雌型銚頭の記述に必要な点について記しておく。すなわちそれは柄・先柄が差し込まれる窩における閉窩式・開窩式の区分である。図2の2に示した銚頭の窩はドリル等で穿たれた盲孔となっており、「閉窩」式とされる。それに対し、後述する図3の1と2等は北海道出土の雌型銚頭であるが、その基部の凹み部分がその窩として作られており、「開窩」式とされる。実際に使用する際には、その凹みの周囲を海獣等の腱製紐で巻き、その紐と凹みとの空隙に先柄を挿入することとなるわけである。

3 海獣猟の地域的概観

北太平洋沿岸地域を大きく四つに分けて述べいく事とする。すなわち①極東地域として日本列島・朝鮮半島・ロシア沿海州、②オホーツク海沿岸地域としてサハリン、オホーツク海北岸、カムチャッカ半島及び千島列島、③ベーリング海・チュクチ海沿岸、④カナダ北西海岸地域である。もちろん北海道は①地域と②地域に、後述する海岸コリヤークは②地域と③地域に股がっていることとなる。また個々の地域も、詳細に見るならその環境は多様である。すなわち③地域の場合は図1に示したように冬期における海水域の有無が指摘される。それは海獣類の棲息に影響を与え、猟のやり方も異なることとなる。従ってそれぞれの地域をさらに細分して記述していくこととなる。

3.1 極東地域

ここではその研究史の上から、3地域に分けて記述していくこととしよう。

3.1.1 北海道・東北地方⁴⁾

完新世の温暖化に伴い、海水面の上昇が起こる。その結果、対馬暖流が日本海に流れ込むこととなり、縄文時代早期8000 B.P.頃⁵⁾には日本海の水温も上がり、現在に近い海況となった(大場1989:677)。太平洋岸においても海水温の上昇が見られ(松島・前田1985:117)、また縄文前期6000 B.P.頃には「縄文海進」として知られる海面上昇が確認されている。こうした過程で変化に富んだ海岸線とそこに豊かな水産資源を見ることとなり、定住化さらに縄文時代の代表的遺跡としての貝塚が形成され、また漁撈具の発展が知られることとなる(山浦1987:1993)。

銚頭としては青森県八戸市長七谷地貝塚また網走市湖底遺跡等からおよそ7000 B.P.縄文早期後半とされる雌型銚頭が発見されている。こうした銚頭は前期以降、北海道のみならず東北三陸海岸部の貝塚からも知られるようになる(高橋2008:図7)。図3の1は前期とされる釧路市東釧路貝塚出土品であり、既述のように開窩式であり、使用时には先柄挿入のため胴部に革紐が巻かれ、さらにそこに銚網も取り付けられる構造である。また先端には獲物に貫入しやすいよう端刃(end blade)を装着するための溝(slit)が作られている。図3の2は後期の同様な例であるが、後端部にはやや複雑な対称的突起が作られている。こうした開窩式銚頭は北海道さらに東北地方において縄文晩期以降も存続する(大塚1966)。

こうした銚頭が出土した遺跡の内、道北オホーツク海岸浜頓別町日の出貝塚は前期、5400 B.P.頃とされるが、その自然遺物分析結果によれば、アシカ・トド・オットセイ・アザラシ類、さらにはイルカ・クジラ類の骨が発見されている。さらにトドの内でもその成獣骨が同定されており(新美2013:27)、オスの場合は1tに達する大きさである(和田・伊藤1999:31)。従って前期段階には本格的な海獣類が開始されたと想定することが可能である。また後期とされる北見市朝日トコロ貝塚からはオットセイ雄とされる骨が発見されており、その季節的回遊を考慮するなら、冬期における海獣類も推定されている(新美2013:28)。

ただ上記した長七谷地貝塚では海獣骨の出土が少なく、むしろ魚骨の出土が多い点から、銚の対象として必ずしも海獣類ではないのではないかという意見もある(金子1980:114)。もちろんそうした考え方を否定出来ないが、近隣の崎山貝塚からはアシカが多量に出土しており、海獣類を否定することはできないであろう(高橋2008:41)。

東北地方三陸海岸以南では、北海道系統のこうした開窩銚頭が点々と発見されているわけであるが、そこでは図3の3と4に示すような雄型銚頭がむしろ一般的である。ただ後期4000 B.P.頃になると仙台湾を中心として図3の5に示すような閉窩式雌型銚頭が登場する。それらには図に見られるように網孔(line hole)を持つものも見られる。こうした閉窩式の成立過程は明瞭ではないが、少なくとも開窩式銚頭との関連で成立したと考えられる。

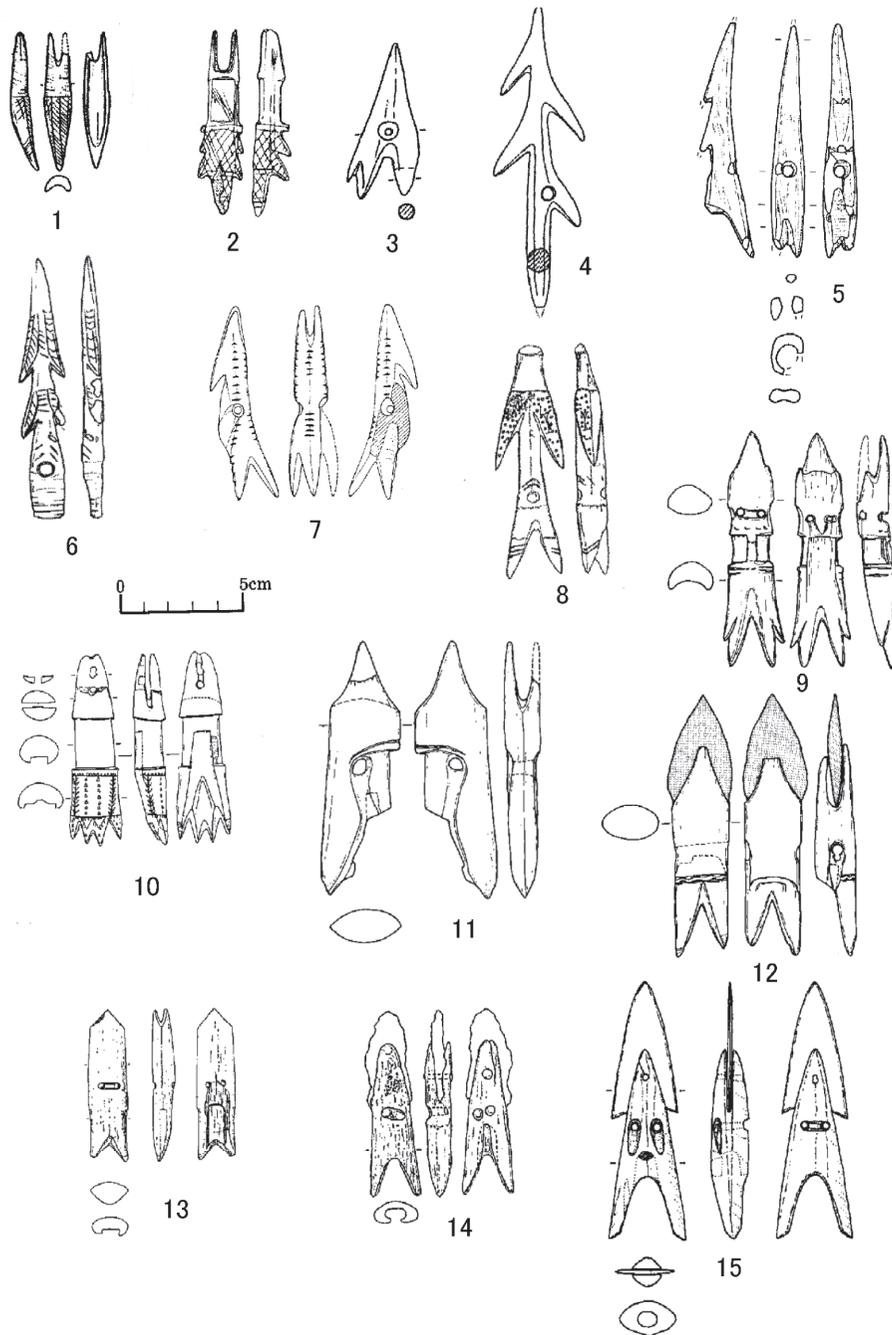


図3 極東地域の鋳頭 1 (北海道・東北地方)
 1～5 縄文時代：1 釧路市東釧路 (前期) 2 北海道入江 (後期) 3 宮城県南境 (中・後期) 4 宮城県瀬沢 (中・後期) 5 岩手県大洞 (晩期) 6～8 続縄文時代：伊達市有珠モシリ 9～13 オホーツク文化：9 礼文町香深井 10 根室市オンネモト 11・12 網走市モヨロ 13根室市弁天島 14 ポスト=アイヌ期：15 神恵内村観音洞窟 アイヌのkite (北海道噴火湾) (出典：1～8 高橋 (2008)：9～13前田 (2002)：14・15山浦 (2008))

縄文時代北海道から三陸海岸部において、銚頭の対象として上記海獣類が想定されが、イルカ類も縄文時代各地の貝塚から発見されており、その「送り場」と想定される遺構が前記の釧路市東釧路貝塚から発見されている。石川県真脇遺跡前期層からは多量のイルカ骨が発見されているが、真脇遺跡においては銚頭を使用せずに「追い込み」による猟法がなされていたようである。ただ銚頭分布域では当然銚頭の対象となったであろう（山浦 2012：140）。もちろん噴火湾アイヌの民族誌に知られるようにカジキ・マグロ・ブリ・マンボウといった大型魚類もその対象となったであろう（更科・更科 1976：501；渡辺 1990：80）。

弥生時代、本州以西では農耕社会が成立・展開するが、伊勢半島に至る太平洋岸の遺跡から縄文系統の閉窩式銚頭が存続する（山浦 2004：49）。また北海道では続縄文時代として狩猟文化が継続するが、ここでは多様な銚頭が認められるようになる。すなわち図3の6はその雄型銚頭であり、図3の7は東北地方縄文時代の系統を引く閉窩式銚頭である。同図8は続縄文に新たに出現する特殊な形態であるが、これに関しては後述する西北九州の銚頭（図5の9）との関係が指摘されている（Yamaura 1998: 327；山浦 2004：42）。

北海道ではこうした銚頭伝統は、オホーツク海沿岸部に紀元後5世紀頃に出現するオホーツク文化に辿ることができる。すなわち図3の9と10はその開窩式、11～13はその閉窩式である。当文化における海獣猟の重要性については、多くの研究者の説くところである（前田 2002：7-15；天野 2008：3-24）。クジラ猟はその危険性、またその技術において海獣猟における最も発達した形態とされるが、図4の1は当期の捕鯨図である。7人乗りの舟を使用し、二本の銚が刺さり、その銚網は舟に繋がりを、さらにもう一本を投げようとするところである。

ただオホーツク海沿岸部以外の地域ではオホーツク文化にやや遅れ紀元後6世紀頃には続縄文文化から擦文文化への展開を見る。ただ擦文文化においては貝塚発見例が少なく、その生業については、畑作存否の問題を含め、多くの問題が生まれることとなる。しかしながらオホーツク海沿岸部ではオホーツク文化・擦文文化の接触・融合として10世紀頃トビニタイ文化の成立が確認されている。こうした融合の結果として、擦文文化にも海獣猟が引き継がれ、結果としてプロト=アイヌ期⁶⁾の銚頭（図3の14）を経て、アイヌ民族誌に知られる銚頭 *kite*（図3の15）が成立することとなる（山浦 2008）。

以上単純化した形で説いてきたが、北海道・東北北部においては縄文時代早期末に出現した雌型銚頭の系譜が連綿として続き、最終的に *kite* に至る過程を型式学的に辿ることができるわけである。ただ銚の対象を海獣類のみ限定することは既述のように問題とされる。縄文文化は各地それぞれにおいて、それぞれの動植物相を全面的に利用する文化として理解される（Aikens and Akazawa 1996: 225）。そうした中、地域的に海獣が棲息するなら、その狩猟のためにあるゆる技術が動員され、結果として雌型銚頭使用の海獣

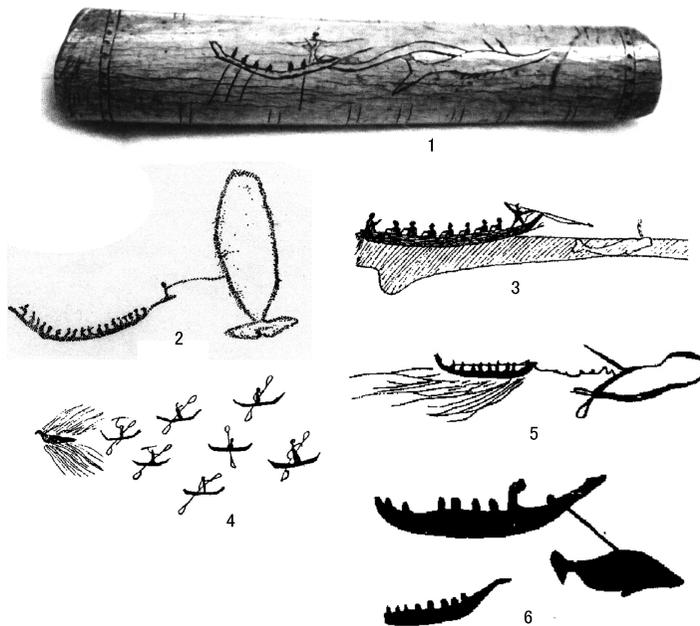


図4 各地の捕鯨図（縮尺不同）

1 オホーツク文化針入れ，オホーツク文化，根室弁天島 2 盤亀台岩壁画 3 ニブフのシロクジラ鯨
4・5 海岸コリヤークの海獣鯨 6 チュクチ半島北岸ピエグティメリヤ岩壁画（出典：1 北構保男所蔵・筆者撮影，2 朴 2004：図5，3 渡部 2012: fig.2，4・5 Jochelson 1908: figs.246・247，6 Диков 1971: 96）

鯨が開始されたと想定される。そこでは海獣鯨が大きな意味を占めていたことは確かであり、北海道における出土人骨炭素・窒素同位体比の分析からは、動物性タンパク質摂取において海獣からの割合が大きいことは明らかになっている。またオホーツク文化人において、殊にその摂取量が顕著だとされている（米田 2006：54）。続縄文時代においては、その銚頭の多様性から道南部において特に海獣鯨が盛んであったと推定されるが、その背景には東北における稲作普及という動向と関連するようである。すなわち海獣類の皮・肉・油脂が農耕民との交易品となった可能性が考えられる（山浦 2009：79）。また近世における噴火湾アイヌのオットセイ鯨では、背景に漢方薬としてその商品価値が高まったことが指摘されている（佐々木 1980；榎森 1999）。

ただ銚頭，それも雌型銚頭の出現を北海道独自の成立とすることができるか否かは大きな問題である。その点については本章最後「3.1.3 アムール川流域」で触れることとしたい。

3.1.2 西北九州から朝鮮半島・沿海州

縄文時代，北海道・東北地方とは別の系譜として西北九州においても雌型銚頭の使用が確認される（山浦 2006）。西北九州の縄文時代貝塚の自然遺物から「西北九州漁撈文

化」の存在が指摘され、その内に「外洋性遺跡群」が説かれている（木村 1994：22）。すなわち大型魚としてカジキ類・サメ類さらにイルカ・クジラ類、またアシカの出土遺

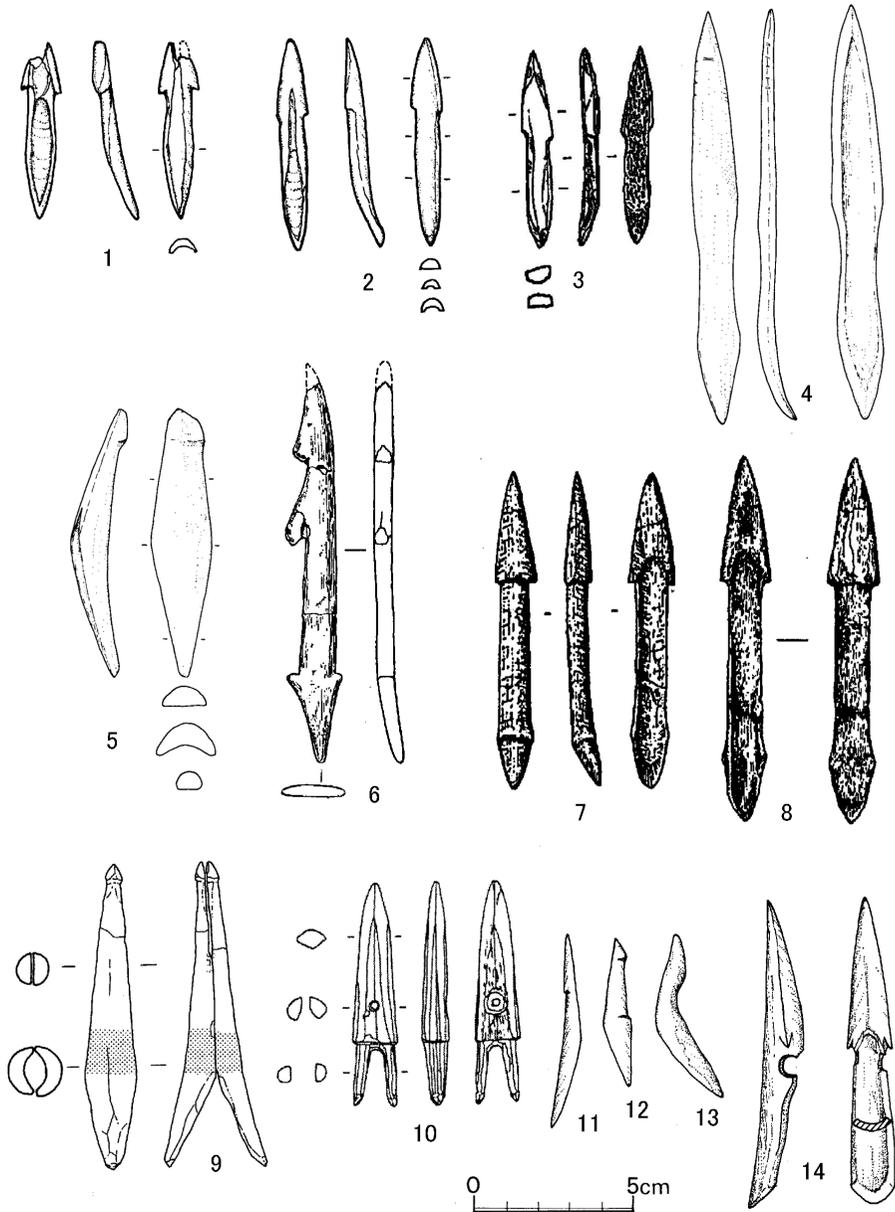


図5 極東地域の鉾頭 2 (九州・朝鮮半島・沿海州)
 1・2 対馬佐賀貝塚 3 韓国東三洞 (河2007:fig.96-3) 4・5 ヤンコフスキー文化 6
 ~8 ボイスマン文化 9 対馬原の辻 10 鳥取県青谷上寺地 11~13 新開流 14 白金宝
 (出典 1・2・4・5・9・11~14: 山浦2004, 3 河2007: fig.96-3, 6 Вострецов 1998:
 fig.6-28, 7・8 Вострецов 1998: fig.6-31, 10 高橋2008)

跡であり、そこでは雌型銚頭が知られている。また五島列島から平戸・唐津さらに壱岐・対馬にかけてはクジラ類の回遊路でもあり、その平戸瀬戸に面した縄文早期末つぐめのはな遺跡では、海峡を抜けるクジラ類が推定されている（川道 2007：168；山浦 2012：142）⁷⁾。そこでは銚頭の出土は知られていないが、網走湖底遺跡等とほぼ同時期7000B.P.ということとなる。

つぐめのはな遺跡とはかなりの時間的間隙があるが、図5の1と2は縄文後期とされる対馬佐賀貝塚出土の開窩式銚頭であり、4000B.P.とされよう。こうした銚頭は長崎県五島列島に至る地域で点々との確認されている（山浦 2006：139）。さらに同様な銚頭は対馬海峡北岸、朝鮮半島でも確認される。例えばその釜山市東三洞貝塚出土品（図5の3）である。もちろんそれは朝鮮半島における縄文時代並行の有紋土器文化期の遺跡であるが、当遺跡は6000年～2000 B.P.に亘る5期の文化層が確認され、マガキ・クロアワビ・イガイを主体とする貝塚である。大型魚としてクロマグロ・メカジキ・サメ類、海獣ではアシカ・オットセイ、さらにイルカ類、またザトウクジラ・シロナガスクジラ、さらには少数ながらゴマフアザラシ（*Phoca largha*）も発見されている（河 et al. 2011：135-149）。つまり暖流系と共に寒流系生物の存在が確認されるわけであり、これは対馬海流のみならず、日本海北岸に沿って南下するリマン海流の影響と見ることができる。またアシカ棲息地であった竹島の存在（和田・伊藤 1994：33）も考慮する必要がある。

東三洞貝塚においては雄型銚頭が多数発見されているが、その3000 B.P.とされる文化層から図5の3に示す開窩式銚頭が出土している（河 et al. 2011：133）。また当遺跡からは縄文式土器も出土しており、捕鯨活動等を行ないながら「食肉・油脂・貝製品・毛皮を扱うマーケット的集落」という性格付けがなされている。

こうした雌型銚頭は朝鮮半島南岸部有紋土器時代のその他の遺跡においても発見されているが（金 2006:14）、その南東岸蔚山には捕鯨活動を描いた岩壁画（図4の2）で有名な盤亀台遺跡が存在する。その岩壁画の年代については多様な説が存在するが（朴 2003：39-67）、少なくともこうした捕鯨図は有紋土器時代まで遡るとして問題なからう（山浦 2012：150）。その舟は誇張されているが、大形舟を使用し、船首の人物とクジラとの間には銚網が描かれている。

こうしたクジラ類あるいは海獣類を狩猟対象とする遺跡はさらに北上する。すなわち朝鮮半島北東端に当たる咸鏡北道西浦項遺跡であり、それに隣接するロシア沿海州に存在する遺跡群である。ウラジオストク周辺では以前から貝塚の存在が目目され、「貝塚文化」あるいは「ヤンコフスキー文化」として3000B.P.頃とされる遺跡が知られていた（Okladnikov 1965: 112）。そこから図5の4と5に示す開窩式銚頭が出土している。さらに近年では6000 B.P.に遡る「ボイスマン文化」が知られるようになった。その期の貝塚自然遺物においてはカキが圧倒的に多く、海水温の高かったことが想定され、アカニシ・

イガイ等も見られる (Вострецов 1998: 274)。また大型魚としてはマグロ (Вострецов 1998: 293)、鰭脚類ではアシカ・トド、さらにゴマフアザラシ、イルカ類・コククジラクも発見されている (Вострецов 1998: 324, 327)。東三洞遺跡に類似する組成とされよう。遺物として釣り針・碇、さらに雄型銚頭 (図5の6) が多数発見されているが、同時に開窩式銚頭も出現している (図5の7と8)。すなわち沿海州から朝鮮半島東岸、さらには西北九州に至る地域において、6000 B.P. 頃から海獣猟が開始され、そこでは雌型銚頭の使用が開始された可能性がある。

図6はボイスマン遺跡周辺地域における環境変化を示したものである。日本列島同様、完新世以降6000B.P.に至る海水面の上昇が確認される。10000 B.P.には現海面より-42mとし、6000 B.P.には2.5~3m程現在より高くなり、日本列島における縄文海進に対応

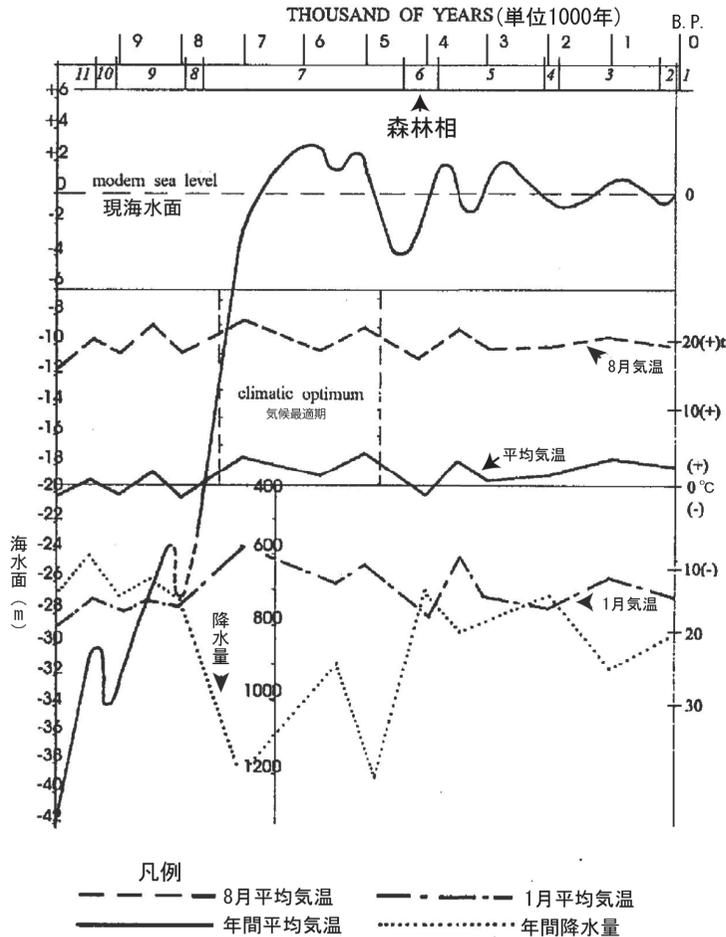


図6 沿海州の気候変化
(出典: Вострецов 1998: fig.1-4)

する。さらに7500-5000 B.P.前後は気候最適期 (climatic optimum) とされ、雨量が増加し、温度は殊に冬期上昇し、年平均気温は3～4度高かったとされている (Вострецов 1998: 27)。その気候最適期の樹林相は「7」としては広葉樹林の広がり指摘されており、その前段階の「11」・「10」では森林ツンドラの要素を有するカバノキ・ハンノキ樹林とされている。こうした環境変化のもとでボイスマン文化が開始されることとなるが、果たしてそこで、どの程度海獣猟が意味を持ったかが問題となる。ボイスマン遺跡の自然遺物には陸獣類 (シカ類・イノシシ等) の骨もかなり発見されており (Вострецов 1998: 324)、調査者は沿海州先住民ウデヘ (Udegey) の民族例を参照しながら、陸獣猟の重要性を想定している。ただボイスマン文化遺跡においてもその第I遺跡においては海獣猟の重要性も指摘されており (Вострецов 1998: 350)、海・陸獣それぞれを季節的生業層に則って狩猟対象としたのであろう。

ところでこうした雌型銚頭使用伝統は、朝鮮半島南部・西北九州においては弥生時代それに並行する朝鮮無紋土器文化期においても確認される。例えば図5の9は弥生中期の対馬原の辻遺跡出土品であり、同形態のものを二つ作り、それを接合して使用する閉窩式銚頭である。無紋土器文化期に属する朝鮮半島南岸の勸島・熊川といった遺跡においても多様な閉窩・開窩式銚頭が確認されている (小林 2009: 177)。さらにそうした銚頭が鳥取県青谷上寺地遺跡 (図5の10) でも出土している。こうした弥生銚頭が、弥生文化の東進と関連して北海道続縄文文化銚頭 (図3の8) にも辿れる可能性がある (山浦 2004: 42; 小林 2009: 181)。さらにこうした銚頭使用の伝統は、農耕社会における漁撈民すなわち「海人」において存続したと理解される (山浦 2012: 147)。

3.1.3 アムール川流域

ここでロシア沿海州の内陸部としてアムール川流域の雌型銚頭について触れておきたい⁸⁾。すなわちアムール川支流、松花江・ウスリー川流域を含む所謂三江平原であり、シホテアリン山脈の南で沿海州海岸部に繋がることとなる。生物地理学から見ると、松花江は黄河の一支流であったが、洪積世後半期「主ウルム亜水期以後」の地殻変動により黄河から分流し、アムール川へ流れ込むこととなり、現流域の淡水魚相を多種、豊富にしたとされている (西村 1980: 103)。

図5の11～13に示すものはウスリー川上流ハンカ湖岸の新開流遺跡出土品であり、6080±130 B.P. (樹輪較正年代) とされている。時期的にボイスマン文化に近く、銚頭も形態的に類似し、土器においてもその関連性が説かれている (大貫 2011: 254)。魚骨が多量に詰まった小竪穴も発見されており、魚類の貯蔵施設と推測されている (山浦 2004: 25)。図5の14は松花江上流の白金宝遺跡出土品である。時代的には下るが、2900±100 B.P. (樹輪較正年代) とされ、形態からは閉窩式と考えられる。さらにその土器についてはアムール川流域の広がる土器型式との関連が説かれている (福田 2007: 152)。

アムール川下流域ではサケ・マス類は当然であるが、その上流域では大型魚としてコイ科の2mに達する草根魚 (*Ctenopharyngodon idella*)、体長1.5mのタイメン (*Hucho taimen*)、3mのアムールチョウザメ (*Acipenser schrencki*)、4mに達するダウリヤチョウザメ (*Huso dauricus*) が棲息しており、その流域民によって利用されてきた (森 1939)。そこでは築あるいは網漁とされているが、最終的に捕殺する際、アムール川流域ナナイ (ゴルディ) では鉄製銚頭が使用されており (凌 1934b: figs.132c-e)、これら内陸河川部出土銚頭もそうした大型魚漁での使用を想定してよいであろう。

ところでナナイさらにアムール川口部からサハリン北部に居住するニプフ (ギリヤーク) は ichthyophagi (魚食民) とされ、ナナイは「魚皮韃子」と記載されている (凌 1934a: 49)。そうした背景として、彼らにおけるサケを含む大型魚類漁があるわけであり、ニプフにおいても銚が使用され (Black 1973: 19)、さらに彼らの場合、後述するように銚を使用してアザラシ類・シロイルカ猟がなされていた (Black 1973: 23)。すなわち銚使用という点で、大型魚漁と海獣猟との間には密接な関係があると考えられる。沿海州海岸部さらに北海道における雌型銚頭出現の背景として、こうしたアムール川流域での大型魚漁の展開があり、そこから海岸部での大型魚漁さらには海獣類猟の成立が考えられるのではなかろうか。もちろん現段階ではアムール川流域の大型魚漁がどの程度遡るか不明である。しかしながら北海道縄文早期における「石刃族文化」の出現を、沿海州を含む地域との関係で考えようとする研究者も存在する⁹⁾。そうした大陸側からの文化波及の一環として北海道における銚頭の出現を考えることもできよう (山浦 2004: 24)。

3.2 オホーツク海沿岸

当地域においては図7に示すように、アムール川から流れ込む多量の淡水により、12月にはサハリン北部からオホーツク海北岸域において結氷が始まり、流氷として3月にかけて北海道沿岸・千島列島へと広がる。そうした海況下、動物相も高緯度的な様相を呈することとなる。すなわちそこではオットセイ・トド・アザラシ類さらには大小のクジラ類の回遊を見る。

ニプフの場合、それら海獣の内でもアザラシ、殊にゴマファアザラシ (*Phoco vitulina*) が主要な対象となり、個人猟は春先に、解氷後は集団猟となる (クレイノヴィッチ 1993: 115-120; 大塚 1994: 547)。集団猟では船・資材を提供する船主には猟成功のための儀礼施行も求められるという (Black 1973: 19)。そこで使用された銚頭として図8の1に3点示したが、それらは明らかにアイヌにおける *Kite* に類するものである (Таксами 1975: 33)。19世紀以降、民族資料収集期におけるアイヌとの強い交流を示す例とされよう。また図4の3は1931年クレイノヴィチがニプフに描かせたシロイルカ猟の様子である (渡部 2012: 132)。9人乗りの舟でシロイルカを追っている。漕ぎ手は船尾に向かって着座しており、正にニプフの漕ぎ方である (Black 1973: 26)。船首に立った銚打ちがどの

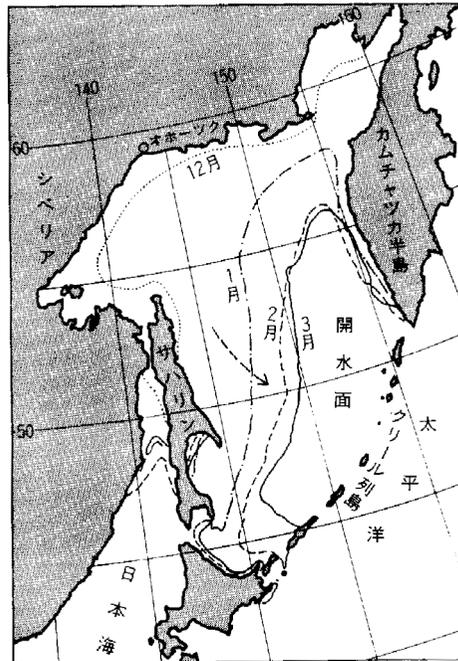


図7 オホーツク海 流氷の広がり
1968～1975年平均 (出典：田畑 1978: 図8-1)

ような銚頭を持っているかは不明であるが、アムール川口と推測されるニブフのシロイルカ猟についてのクレイノヴィチ (1993: 33) の記述から、明らかに雌型銚頭が使用されている。

ニブフの銚頭として報告されているのは上記のようにアイヌ系ともされるものであり、その先行形態として彼ら独自の銚頭が存在したであろう。ただ残念ながら考古調査が進んでおらず、そうした資料は知られていない。ただ北緯50°に近いタライカ湖岸からは興味深い銚頭の一群が紹介されており、それらはオホーツク文化の終末期以降とされるものである (前田 2011)。図8の2はその1点であるが、これには一対の網孔が存在する点等から図8の1と類似することは確かであり、さらに後述するトカレフ文化の図8の14との類似性も指摘される。

もちろんサハリン南部の貝塚からは多くの銚頭が発見されているが、それらは北海道続縄文さらにはオホーツク文化と関連するものである。つまり南サハリンは続縄文文化分布域であり、その銚頭は北海道の系譜を引くものである。また南サハリンはオホーツク文化成立地域とされるが、その銚頭の系譜をすべて南サハリン続縄文銚頭に求めることができるか、という問題も存在する (山浦他 2013: 23)。オホーツク式土器の成立過程においては北サハリン・アムール下流域との関係が指摘されているが (山浦 2004:

91；福田 2007：135；木山 2012：39），残念ながら銚頭において，そうした関係を明示する資料は現段階においては発見されていない。

次にオホーツク海北岸に住む所謂海岸コリヤークを見てみよう。彼らにおいてサケ漁が基本とされるが（Jochelson 1908: 525），海獣猟も重要な生業とされ，3～6月と9月中旬から11月後半まで営まれる（Antropova 1964a: 856）。図4の4と5は20世紀初頭ヨヘルソンがコリヤークに描かせたものである。図4の4は各人カヤックに乗り，集団でアザラシを追う姿である。また図4の5は9人乗りの舟を使つての捕鯨であり，クジラに銚が一本刺さり，クジラと舟の間には銚網が描かれ，逃げるクジラに舟が引かれていく様子である。

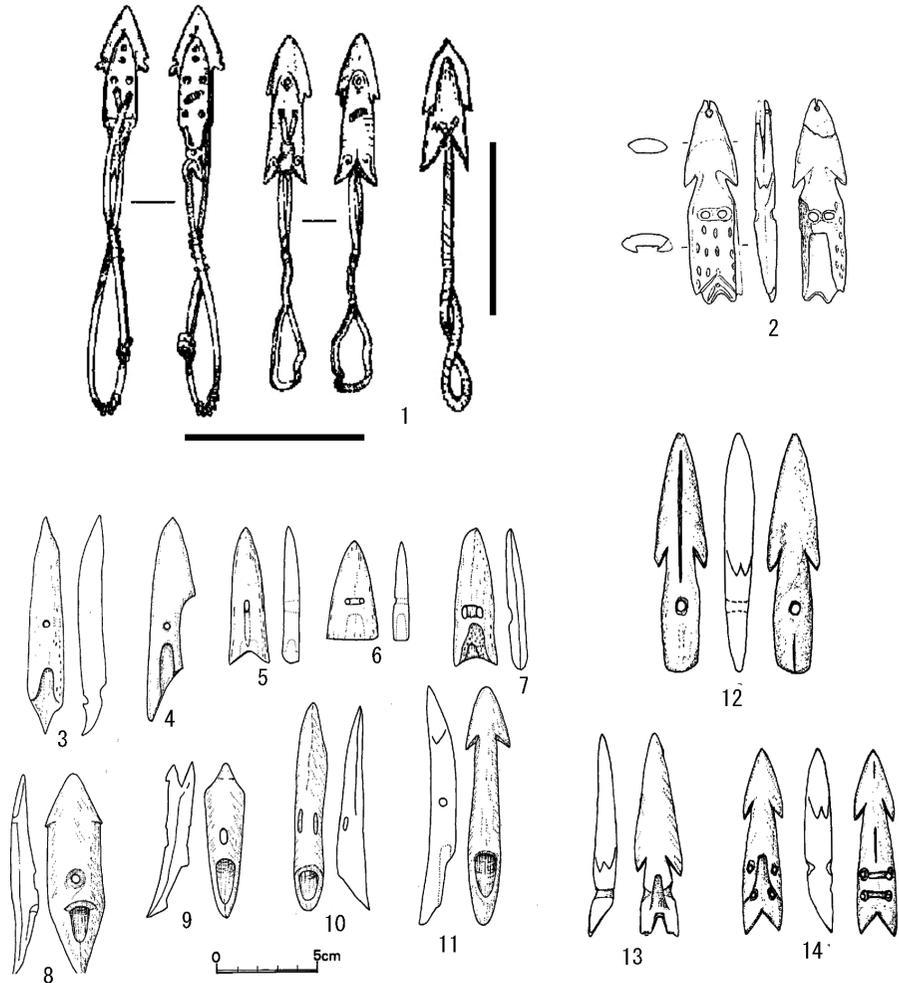


図8 オホーツク海沿岸地域の銚頭
 1 ニブフの銚頭（縮尺不明） 2 サハリン・タライカ 3～11 古コリヤーク文化 12～14 トカレフ文化
 （出典：1 Таксами 1975: 33, 2 前田 2011, 3～14 山浦 2004）

ただ当地域の考古学調査は充分ではなく、彼らの海獣猟が時間的にどの程度遡るかについては明確ではない。現在知られるロシア考古学者の報告としては次のようなものである。すなわちワシリエフスキー（Васильевский 1971）が「古コリヤーク文化」として報告している資料があるが、その実年代は1500 B.P.以降としている。さらにレヴェジンツェフ（Лебединцев 1990: 2012）はトカレフ（Tokarev）文化を提唱し、2200±470～1630±50 B.P.（Lebedintsev 1998: 301）、また紀元前7世紀～紀元後2世紀といった年代を提示し（レヴェジンツェフ 2012: 70）、古コリヤーク文化に先行するとしている。

両文化において、雌型銚頭と共に雄型銚頭も多く発見されているが、図8の3～11に示したものが古コリヤーク文化とされた雌型銚頭であり、3と4は開窩式、5～11は閉窩式である。ワシリエフスキーにおいては、開窩式のものについての言及はないが、閉窩式のものについては紀元後500年以降という時間枠の中で考えている。すなわち図8の5～9は紀元後500年以後、10は紀元後1300年、11は紀元後1500年としている（山浦 1980: 8）。5～9は非常に個性的な銚頭であり、その系譜は不明と言わざるをえない。10と11は現コリヤークの居住地域であるカムチャッカ半島北部太平洋岸まで分布が確認されており、後述するベーリング海峡プヌーク（Punuk）文化の影響を見ることも可能である（山浦 2004: 151）。

図8の12～14がトカレフ文化とされたものであり、12は雄型銚頭、他2点は開窩式雌型銚頭である。開窩式のもの是一对の逆刺を持ち、また14のように窩の両側に二対の孔が見られる点が特徴的である。こうしたトカレフ文化特有の銚頭が、型式学的にも古コリヤーク文化の銚頭に先行するか、という点が問題とされよう。その構造においてトカレフ文化の銚頭は古コリヤーク文化とされた図8の3と4の開窩式と比較した時、明確な網孔を持たないという点でより「プリミティブ」な感を与える。むしろ両文化を別系統として理解することも可能性かもしれない（山浦 2004: 152）。またトカレフ文化が2200B.P.前後まで遡るかという点も問題となる。レヴェジンツェフにおいてはC14年代結果を全てそのまま受け入れ、むしろ拡大解釈しているとされよう。トカレフ文化における土器は、その胎土・器形・紋様から北海道オホーツク式土器との関係を想定せざるえない点がある（菊池 1995: 391；山浦 2004: 148）。さらに前記した北サハリンの銚頭（図8の2）との関係を考慮するなら、その年代は少なくとも紀元後1千年紀に考えておくべきであろう。すなわち現段階では、オホーツク海北岸における雌型銚頭の出現、海獣猟の成立は、紀元前後以降とされる。

カムチャッカ半島に目を向けると、クラシェニンニコフ（Krasheninnikov 1972）の報告により、サケ類の膨大な遡河、先住民イテリメンによるその漁と保存食として重要性は良く知られたところである。「彼らにおいてサケはパンにあたる」という記載もあるが、同時に海獣類の食糧上の重要性も説かれている（Krasheninnikov 1972: 226）。それらはアザラシ類・オットセイであるが、南部のイテリメンにおいてはトリカブト毒を使用



図9 最終氷期極相期 18000年前のベーリンジア
(出典：米倉 2000：図7-4)

したクジラ猟また東海岸ではラッコ猟もなされていた (Antropova 1964b: 877)。

当地域の考古学調査としては古くはヨヘルソンの調査 (Jochelson 1928) が知られるが、その内陸中央部カムチャッカ川沿の14300±200B.P.に遡る多層遺跡ウシキ (Ushiki) が著名である。それは当地域における人類居住の古さを示すものではあるが、残念ながら本論と関係するところは少ない。ただ表土直下の第1文化層 (675±80 B.P.) から雄型銛頭が発見されているのは興味を引くところである (Dikov and Titov 1984: 75)。近年の研究においては、カムチャッカ半島東岸における先史文化として大きく三期細分され、タリンスキー (Тарьнский) 期 (紀元前1千年紀)・クロノツキー (Кроноцкий) 期 (紀元後1千年紀)・ナルイチェヴォ (Нальчевский) 期 (紀元後2千年紀) とされている。タリンスキー期では骨角器は発見されていないが、クロノツキー期からは雄型銛頭が知られ、さらにナルイチェヴォ期からは雌型銛頭、その開窩・閉窩式の両者が発見されている (Пономаренко 1985: 163)。これら銛頭は、上記の古コリヤーク文化のカムチャッカ半島北部への広がりに関係するであろう (山浦 1980: 11)。一方カムチャッカ半島南部でも銛頭が発見されているが、その南端ロバトカ岬にはアイヌ居住も説かれるわけであり、その銛頭の多くは、千島列島を通しての北海道からの伝播として理解されるものである (山浦 2004: 144)。

以上述べてきたように、オホーツク海沿岸地域の銛頭についてはその南部においては北海道との関連で理解されるが、北岸域における海獣猟の展開過程については不明な点が多い。ただ現在の考古調査段階では、紀元前後以降に海獣猟が成立したと考えておくべきであろう。さらに説くなら、そこでの海獣狩猟の発展において、ベーリング海峡辺、エスキモーからの影響があった可能性もある。

3.3 ベーリング海・チュクチ海沿岸

最終氷期、当地域は海水面の低下により、図9に見られるベーリンジア (Beringia) と

される広大な地域が存在していた。それは現ベーリング海峡を中心として南北幅1500 kmを越える陸橋であり、そこにはマンモスをはじめとする大型草食動物類が徘徊する「マンモステップ」とされる草原、ツンドラ地帯が広がり（福田 1995: 80）、さらにそれらを追った狩猟民も存在した。しかし図10に示されるように、最寒冷期18000 B.P.以降の地球規模の海水準変動（eustatic）により、10000 B.P.頃には現海面より-40m程となりベーリング海峡が成立した（米倉 2000: 183）。また温暖化に伴い、植物相・動物相も大きく変わっていく。北アメリカにおいては過去170万年の気候変化において、その交代期それぞれに大型哺乳類数種が絶滅しただけであったが、12000 B.P.前後においてはマンモスを含む31属が絶滅するという大変動を見ることとなった（米倉 1995: 31-36）。もちろんツンドラ帯は縮少し、常緑針葉樹林帯が北上する。図11に示したものは南アラスカにおける花粉分析を基礎として推定された10000 B.P.以降7月の平均気温である。そこでは8000 B.P.を頂点として5000 B.P.まで高温期（Hypsithermal）とされ、およそ4℃程高い時期もあったことが示されている。気温変化と海水準変化とを直接結びつけることは慎重でなければならないが、図1に示したベーリング海における冬期結水域も北上

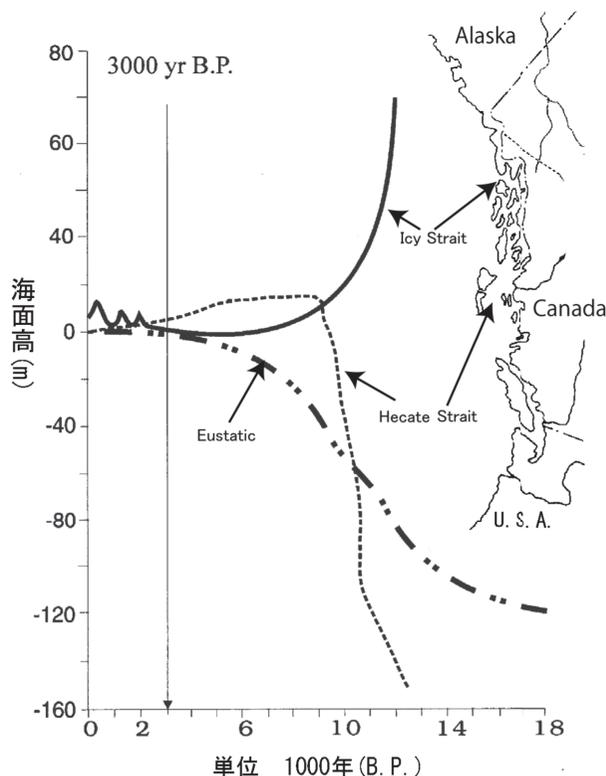


図10 南アラスカの海水準変動
(出典：Mann et al. 1994: fig.9)

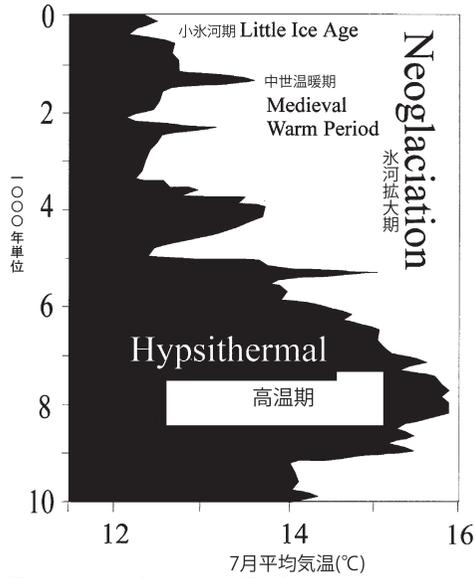


図11 南アラスカにおける気温変動
(出典：Mann et al. 1994; fig.2)

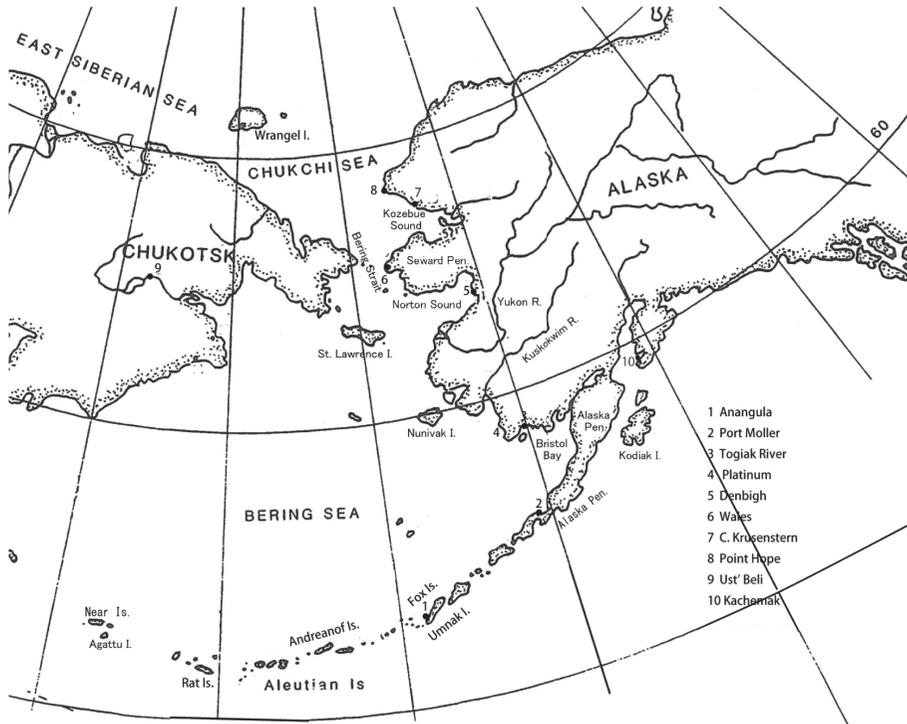


図12 アラスカ主要地名・遺跡名
(出典：Ackerman 1998: fig.2)

し、魚類、海獣類の生息域、移動・回遊路も現在より北上していたとしてよいであろう。

こうした環境変化に対し、ベーリング居住民はあくまで陸獣を求めて、類似する環境へ向かった人々、あるいは変化する環境に適応しようとした人々もいたであろう。例えば現アラスカ内陸部では16000~13000 B.P.とされるトレール=クリーク (Trail Creek) 遺跡があり、また現海岸線に近いアクマック (Akmak) 遺跡 (9700 B.P.) 等が知られているが、それらは「古極北伝統」(Paleo-Arctic Tradition)¹⁰⁾として一括され、陸獣としては中型であるカリブーをその対象として狩猟活動を継続したとされている (Dumond 1978: 27)。

以下では、当地域における自然環境、民族誌などを考慮し、三つの地域に分けてその後の展開を述べていくこととする (図12参照)。

3.3.1 ベーリング海峡周辺

当節ではチュクチ海沿岸とベーリング海峡の南、エスキモーにおける東エスキモー語の分布圏 (宮岡 1987: 63) とされるセワード (Seward) 半島南岸、ノートン (Norton) 湾東岸に至る地域を見ていくこととしたい。

ただ当地域においては完新世高温期とされる沿岸部の遺跡発見例は少ない。それは上記したようにカリブー等の陸獣狩猟民の存在が想定され、遺跡発見例が少ないのはその移動性が強い生活が存続したためとされている。ただある程度の漁業、すなわち簡単な築漁、あるいは措漁等が開始されたことは推測されている (Dumond 1978: 31)。またアラスカ内陸部には「北方古文化伝統」(Northern Archaic Tradition) とされる文化が設定されており、それは民族誌に知られる森林帯に適応したアサパスカン (Athapaskan) インディアンとの関連が想定されている (Anderson 1984: 83)。

当地域において、エスキモーとの文化的関連が遡られる最古の文化は「デンビー文化」(Denbigh Flint Complex) である。その出現年代としては2500~2200 B.C.とされている。遺跡はアラスカ内陸部でも発見されており、その主要な生業としてカリブー猟、さらに春先にはアザラシ猟を行なった可能性が想定され、また浅い竪穴住居も知られている (Dumond 1978: 35; Anderson 1984: 85)。ただ彼らにおける銛の存在は確認されていない。しかしその文化系統はカナダさらにはグリーンランドまで広がっており、一定程度の海獣猟がなされたことが推測されている (山浦 2004: 173)。すなわちカナダ、グリーンランドにおけるデンビー文化の系統は「原エスキモー (Paleo-Eskimo) 文化」あるいは「極北小石器伝統」(Arctic Small Tool Tradition) と総称されているが、そこでは雌型銛頭が発見されていることがその根拠とされている (Wright 2006: 408)¹¹⁾。

デンビー文化を継ぐ諸文化は「ノートン伝統」(Norton Tradition) として一括されることもあるが (Dumond 1977: 155; Arutiunov and Fitzhugh 1988: 117)、そこには古捕鯨 (Old Whaling) 文化 (3000 B.P.)、その後のチョリス (Choris) 文化、ノートン (Norton) 文化

(2500 B.P.) が包括されている。ただ古捕鯨文化については、その名称とする「捕鯨」が実際なされたか、という疑問が提出されている (Ackerman 1998: 255)。ただ小型のアザラシ猟用とされる雌型銚頭が出土している (図13の1)。図13の2はチョリス文化の雌型銚頭であるが、その堅穴に伴う自然遺物分析の結果では、セイウチは見られないが、小形アザラシ20%、アゴヒゲアザラシ 5%、カリブー 50%といった報告がある (Giddings and Anderson 1986: 190-191)。さらにノートン文化 (Giddings 1964: pl. 36-17~20)、それと関連するポイント・ホープのニア・イピウタック (Near Ipiutak) 文化からは図13の3~6に示すような多様な雌型銚頭が発見されている (山浦 2004: 173)。

すなわち4500 B.P.以降、遅くとも3000 B.P.頃にはベーリング海峡周辺域においては雌型銚頭の使用と共に、アザラシ類を中心とした海獣狩猟文化が成立したと想定してよいであろう。それら雌型銚頭の系譜については、「2.3.4雌型銚頭の系譜」においても触れるが、チュクチ半島北岸の沖ウランゲル島においては3400B.P.とされるセイウチ牙製雌型銚頭 (図13の7)、さらにチュクチ半島アナディール川沿い内陸部ウスチ=ベリ (Усть-бель) でも紀元前1千年紀とされる類似する銚頭 (図13の6) が出土している (山浦 1980: 10)。

これら銚頭の系譜を辿ると、ベーリング海峡中心に紀元前後以降オクヴィック (Okvik) 文化、古ベーリング海 (Old Bering Sea) 文化 (山浦 2011)、プヌーク (Punuk) 文化が、またプヌーク文化と並行してチュクチ海岸部には紀元500年頃バーナーク (Bimirk) 文化が展開し (山浦 2010)、さらにそこから紀元1000年前後にはテューレ (Thule) 文化が成立する (Yamaura 1979)。これら諸文化において雌型銚頭は多種・多様な展開を見せる。すなわちオクヴィック文化 (図14の1)・古ベーリング海文化 (図14の2)・プヌーク文化 (図14の3) においてはセイウチ牙製銚頭に見事な文様が施されるようになり、またセイウチが主要狩猟対象となる。体重から見ると大型アザラシであるアゴヒゲアザラシが300kg、トド雄が1tであるのに対し、セイウチ雄は3tに達するわけであり (西脇 1965)、そこに海獣猟技術の発展が指摘されよう。またアジア・エスキモーは「セイウチの民 (walrus people)」と呼ばれるように、セイウチが主要食糧とされ、またイヌ用餌としても重要な意味を有した (Krupnik 1993: 70)。ただセイウチのそうした重要性にも拘らず、アザラシに対するような儀礼、例えばその頭部の海への「送り」といった儀礼は、セイウチに対してなされることはなかったという (Collins 1937: 248)。また図15はアラスカ北極海岸部における紀元500年程のバーナーク文化から、テューレ文化を経て19世紀に至る雌型銚頭の変遷が示されている。すなわち最下段クグスガルック (Kugusugaruk) 遺跡から最上段ウトキアヴィック (Utkiavik) 遺跡に至る4遺跡出土雌型銚頭が形態上19型式に細分され、それらの形態、量的変遷が示されている (Ford 1959: Fig. 35)。こうした資料からもオクヴィック文化以降彼らにおける雌型銚頭への関心の高さ、海獣猟の重要性が理解されよう。また図4の6はチュクチ半島北極海岸ベェグトイ

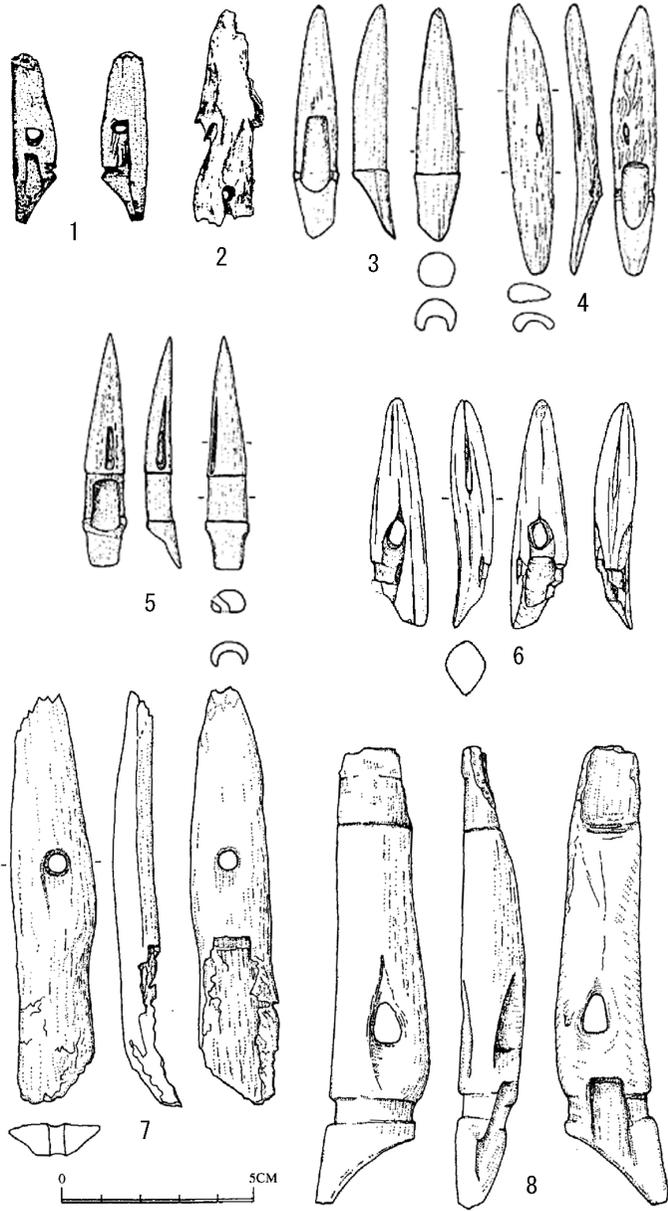


図13 ベーリング海峡周辺の雌型銚頭
 1 古捕鯨文化 2 チョリス文化 3~6 ニヤ=イビウタック文化 7 ウスチ=ミ
 リ遺跡 8 ウランゲル島
 (出典：1~6：山浦：2004， 7・8：山浦 1980: fig.7)

メリヤ (Пегтымеля) 遺跡で発見された岩壁画である (Диков 1971)。8人程がウミアックに乗っての捕鯨図である。これは海岸チュクチの手による可能性もあるが、時期的にはチューレ文化期、紀元後1000年頃以降としてよいであろう。もちろんそれ以前から捕

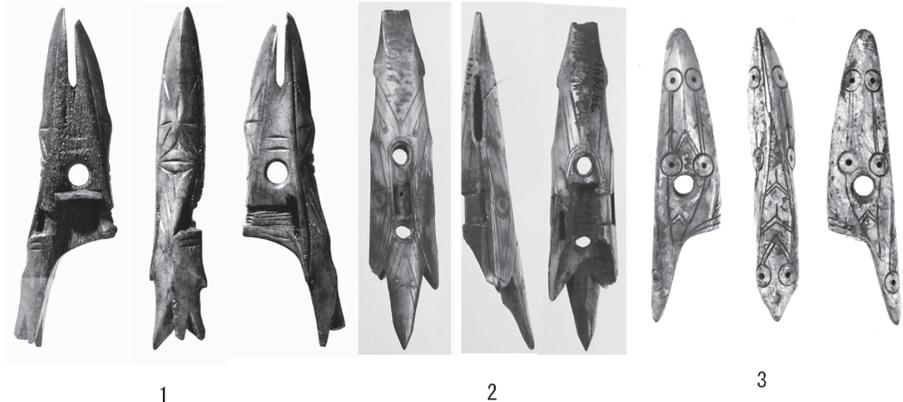


図14 オクヴィック文化以降の銚頭
 1 オクヴィック文化 (長さ8.5cm) : 2 古ベーリング海文化 (長さ10.4cm) : 3 プヌーク文化 (長さ7.8cm)
 (出典 : 1 Little Diomed Island, Jenness 採集, National Museum of Civilization, Cat. No. IX-F-8663, Morrison 1991: fig.7-a 筆者撮影, 2 Little Diomed Island Collins 採集, National Museum of Natural History, Cat. No.347941 筆者撮影, 3 St. Lawrence 島出土, National Museum of Natural History, Cat. No.371933, Collins 1937: Pl.28-28 : 筆者撮影)

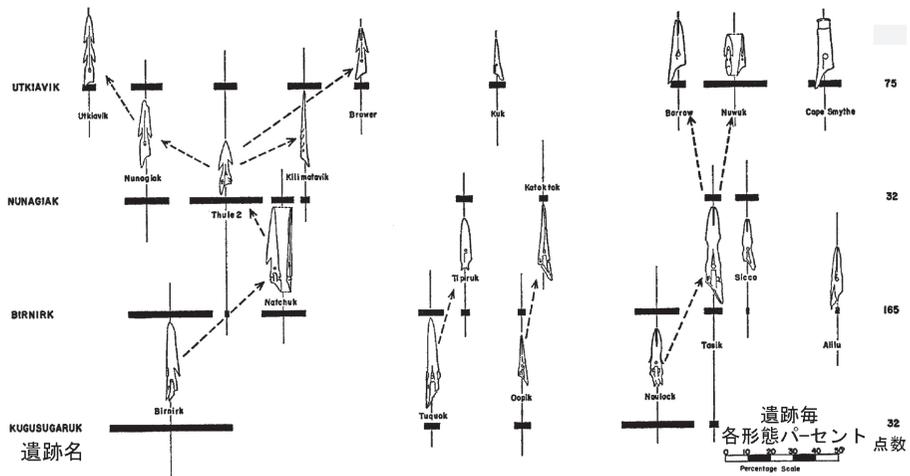


図15 北アラスカ バーナーク文化から19世紀までの銚頭の変遷
 (出典 : Ford 1959: Fig.35)

鯨が行なわれたことは否定出来ないが、テューレ文化以降、集落それぞれにウミアリク (Umealik, ウミアック舟主) を中心に捕鯨組が組織され、民族誌 (Rainey 1947 ; 岸上 2012) に知られるような捕鯨が開始されたとされよう (山浦 1995: 212)。

3.3.2 南西アラスカ地域

当地域としては現在いわゆるユピック (Yupik) とされるエスキモーの居住域、ノートン湾南岸、ユーコン (Yukon) 川流域からプリストル湾沿岸地域である。そこにはユー

コン川やクスコクイン (Kuskokwim) 川等の大河による広大なデルタが形成され、多くの湖沼が広がっている。従ってサケ類を中心として遡河魚類が豊富であり、それが食糧の80%を占めるとされ (Fitzhugh and Kaplan 1982: 86)、当地域のエスキモーを海獣狩猟民とする理解は当たらないとされている (Vanstone 1984: 233)。ただ当地域に含まれるヌニヴァック (Nunivak) 島では海獣猟の意味は大きい (Lantis 1984: 213)。

ヌニヴァック・エスキモーを除くと南西アラスカにおいてはゴマファアザラシを対象とする息穴猟はなされず、むしろアゴヒゲアザラシ (*Erignathus barbatus*) が重要視されている (Oswald 1967: 102-104; Fitzhugh and Kaplan 1982: 71)。それはアゴヒゲアザラシがセイウチ同様、冬期の完全結水域を忌避し、破碎氷域を好むため、冬期に当地域へと南下して来ることによる (Burns 1981: 152)。こうしたアザラシ類の狩猟には、春期カヤックから投擲器¹²⁾を使用して銚が発射される。さらにそうした銚には雌型・雄型銚頭両方が使用され、同様な狩猟法はシロイルカ猟においても行なわれている (Fitzhugh and Kaplan 1982: 69)。ただセイウチ猟には雌型銚頭が使用されるという (Fitzhugh and Kaplan 1982: 80)。

従って北アラスカと比較するなら、海獣猟において雄型銚頭が多用されることとなる。ただ南西アラスカにおいてもノートン伝統とされる遺跡が調査され、そこからはベアリ

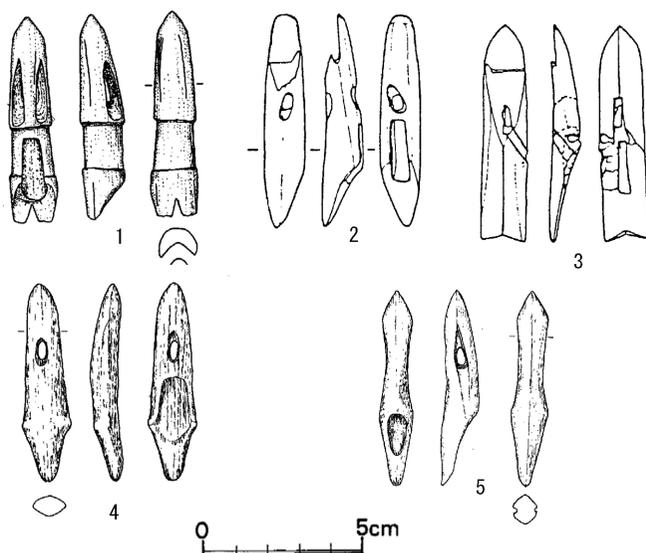


図16 南西アラスカ及びアラスカ半島・太平洋岸の銚頭

1 トギアック 2・3 ポート=モーラー 4 カチェマックⅠ期 5 カ
 チェマックⅢ期

(出典：1 Togiak 採集品, National Museum of Natural History, Cat. No.362824, 筆者実測, 2・3 Port Moller 出土, Okada et.al.1979:fig.6, 4 カチェマックⅠ期, University Museum, University of Pennsylvania, Cat. No.32-7-1035, de Laguna 1934 Pl.38-9, 山浦1977:fig. 2-1, 5 カチェマックⅢ期, University Museum, University of Pennsylvania, Cat. No.32-7-15, de Laguna 1934 Pl.38-2, 山浦1977: fig.3-3)

ング海峡周辺に比べると少数ではあるが、雌型銛頭が出土している。すなわちノートン文化銛頭（図13の3～6）に類似する銛頭がヌニヴァック島で発見されており（Nowak 1982: fig.5）、さらに当地域独自の特徴を示す雌型銛頭（図16の1）も認められる（Ross 1971: fig.78）。すなわち当地域の雌型銛頭はベーリング海峡周辺オクヴィック文化以降とは異なる展開を見たとして理解される。こうした点については次ぎに述べる太平洋岸・アリューシャン列島出土例も含め、「2.3.4 雌型銛頭の系譜」において触れることとする。

3.3.3 アラスカ太平洋岸・アリューシャン列島

図1に示したように当地域は上記二地域と大きく異なり、冬期海氷が見られず、通年海上での生業活動が可能となる。もちろん当地域内においても大きな相違がある。すなわちアリュートの住むアリューシャン列島では陸上動物がほとんど棲息せず、海洋漁撈活動が主要な生業となる。一方のアラスカ半島以東はエスキモー居住域となるが、ここではカリブーが見られるようになり、さらに東に向かうと針葉樹林帯が海岸部まで広がり、クマやシロイワヤギ（mountain goat; *Oreamnos americanus*）などの陸獣類もその狩猟対象となってくる（Clark, D. 1984: 189）。

アリュートにおいては上記のように食糧の大半は海から得るわけであり、貝類・海藻・鳥卵の採集、釣り・網漁、鳥類、海獣類がその生業となる。海獣としてはラッコ、アザラシ類、オットセイ、トド、イルカ、クジラ類、稀にセイウチが対象となった（ラフリン 1986: 40; Lantis 1984: 174）。後述するチャルカ（Chaluka）遺跡では、トド骨の点数が鰭脚類の20%を占め、その平均体重454kg、アザラシ類やオットセイの体重を40～45kgとするなら、狩猟されたトド肉量はその他鰭脚類を上回るという計算もある（ラフリン 1986: 154）。

こうした海獣類は太平洋エスキモーすなわちアラスカ半島東部を含めコディアック（Kodiak）島に居住するコディアック・エスキモー、プリンス・オブ・ウィリアム（Prince of William）湾のチュガーチ（Chugach）・エスキモーといった人々においてもその対象となった。ただ太平洋エスキモーの場合は特にゼニガタアザラシが重要な狩猟対象とされていた（Clark 1984: 189）。またラッコについては彼らの間で食糧として本来どの程度の意味があったか、という疑問が提出されている。すなわち18世紀末以降ラッコ毛皮獲得のために進出したロシア人によってラッコ類の重要性が生じたわけであり、本来的にアリュートや太平洋エスキモーにおいて食糧・毛皮としてどの程度意味があったのか、という疑問であり、その重要性について否定的意見もある（ラフリン 1986: 83）¹³⁾。

またアリュートにおけるトリカブト毒を使用したクジラ類は広く知られているが（Lantis 1984: 174）、太平洋エスキモーにおいてもトリカブト及びその他を混入したものを塗布してのクジラ類がなされていた（Clark 1984: 187）。それらについては種々の研究があるが（Lantis 1938; Heizer 1943）、そうしたクジラ類ではクジラに銛を打ち込むにしても、

その後積極的な捕獲活動はなされず、その漂着を待つという猟であった。その間、狩猟者は「お籠もり」あるいは「祈り」というような行動をとるわけであり、「消極的」或いは「祭祀的」狩猟活動ともされよう。

太平洋岸においては、南西アラスカ同様、あるいはそれ以上にサケ漁が重要となり、その重要性は次節北西海岸部インディアンに繋がっていくこととなる。ただ一方ではアザラシ、殊にその油はアリュートや太平洋エスキモーにおいて基本的食糧の一部と見なされ、それなくしては飢餓感を抱くこととなり、さらには病魔に冒されるという理解がなされていたという (Lantis 1984a: 175)。

当地域でも海獣猟に銚が使用されるが、南西アラスカと比較した場合、さらに雌型銚頭は少なくなり、雄型銚頭使用が一般的となる (Oswald 1967: 129)。またその際、南西アラスカと同様投擲器が使用される場合が多く、さらにコディアック島においては弓矢の先に雌型・雄型銚頭を取り付けてのラッコ猟がなされている (Mason 1900: Pls.16・17; Birket-Smith 1941: 139)。

考古学的に見るなら、彼らの間における海獣猟開始について多様な説が説かれている。例えばアリューシャン列島東部に位置するウムナック (Umnak) 島沖の小島アナングラ (Anangula) からは8000 B.P.とされる遺跡が知られるが、その島嶼という遺跡立地から、舟の使用、海洋資源の利用が開始され、さらに海獣猟の存在を推定する研究者もいる (ラフリン 1986: 122ff; ワークマン 2006: 53)。自然遺物はほとんど検出されておらず、はたしていかなる形態での海獣猟がなされたかが問題となろう。例えばオットセイあるいはラッコの撲殺猟は良く知られたところである (ラフリン 1986: 83; Clark 1984: 189)。その遺物としては石刃・尖頭器・彫刻刀・スクレーパー・「石錘」・摩石が知られるのみであり、骨角器類の発見はない (Laughlin and Aigner 1966)¹⁴⁾。ただ「石錘」は16点出土しており、小規模の網漁の可能性はあろう。またこうした年代とされる遺跡はアラスカ半島東方、カナダ北西海岸にかけても点々と発見されており、舟の使用と共に、一定の漁業活動が開始され、そうした人々がカナダ沿岸に沿って南下した可能性を否定できないであろう¹⁵⁾。

大きな間隙があるが、アナングラ遺跡に近いウムナック (Umnak) 島チャルカ (Chaluka) 遺跡は4000 B.P.とされ、その遺構・遺物は民族誌に見られるアリュートの生活を想起させるとしている (ラフリン 1986: 137)。さらにアラスカ半島先端部のポート・モーラー (Port Moller) 遺跡では4500 B.P.から貝層堆積が始まり、中断はあるが600 B.P.までほぼ継続して遺構・遺物が確認されている。そこではムラサキイガイが主体を占めるが、出土動物骨の95~70%は海獣類である。その中心はアザラシ類であり、特にワモンアザラシが多数同定されている (岡田宏明・岡田淳子 2006: 200)。両遺跡とも4000 B.P.から雄型銚頭の存在が知られ、さらにポート・モーラー遺跡からは図16の2と3に示す開窩式銚頭が発見され、その年代は1300 B.C.前後とされる (山浦 2004: 173)。

アラスカ半島からその東方太平洋岸の先史文化は一般に三期に区分されている (D. Clark 1935: 203-227; Crowell 1988: 132; B. Fitzhugh 2003: 39)。最も調査の進んだコディアック島においては、紀元後1000年以降は先住民であるコニヤッグ (Koniag) つまりコディアック・エスキモーに倣ってコニヤッグ伝統が設定されている。その前段階は二分されているわけであるが、その第一段階はオーシャン・ベイ (Ocean Bay) 伝統である。その前半期に当たるコディアック島対岸、アラスカ半島太平洋岸タクリ・アルダー (Takli Alder) 期は6000~4500B.P.とされ、その自然遺物には海獣骨が見られ、多い順にゴマフアザラシ・イルカ・ラッコ・トドとされ、少数の大型クジラ類も挙げられ、陸獣にはカリブー・ヒグマが少数見られるという。さらに当期には雄型銛頭が発見されている (Dumond 1998: 193)¹⁶⁾。

オーシャン・ベイ伝統に継ぐカチェマック (Kachemak) 伝統は4000~900B.P.とされ、2000B.P.には漁撈技術の発展が明瞭になり、開窩式銛頭が見られるようになるという (Crowell 1988: 133)。ただ近年ではその絶対年代については前・後期に二分して、前期3200~2500 B.P., 後期2500~800B.P.とされている (B. Fitzhugh 2003: 47)。その前期、カチェマック I 期とされるが、ここでは開窩式銛頭 (図16の4) が (de Laguna 1934: Pl. 38), その後期、終末段階カチェマック III 期ともされるが、ここでは閉窩式銛頭 (図16の5) が発見されている。またアラスカ半島太平洋岸のクカック・ビーチ (Kukak Beach) 期 (1500~1000B.P.) とされる遺跡でも、閉窩式銛頭が確認されている (G. Clark 1977: Pl. V-71-73)。

すなわちアラスカ太平洋岸・アリューシャン列島東部においては6000 B.P.頃にはラッコやアザラシ類の狩猟が開始され、ここでは雄型銛頭が使用された。さらに3500 B.P.ごろには厚い貝層の堆積が見られるようになり、チャルカ遺跡やポート・モーラー遺跡、またカチェマック伝統とされる遺跡においては堅穴住居も発見され、より定住的な生活が始められたとされよう。そして3000 B.P.頃には雌型銛頭が知られるようになったとしてよいであろう。

3.3.4 雌型銛頭の系譜

最後ではあるが当節のまとめとしてベーリング海峡周辺からアラスカ太平洋岸における雌型銛頭の系譜・系統といった点について触れておきたい。

既に触れた図16の2と3はポート・モーラー (Port Moller) 出土品であり、2は1320±100 B.C., 3は1200±80 B.C.とされる。両者共に先端には端刃用スリットを持つ点はやや発達した形態ともされる。ほぼ同時期とされる図16の4のカチェマック I 期銛頭はそうしたスリットを持たず、より単純な形態である。こうした銛頭は既述のようにヌニヴァック島に知られ、さらに北に目を向けるなら、ベーリング海峡を越えてポイント・ホープ (Point Hope) のニア・イピウタック期 (図13の3~6) にも見られるわけであ

る。また図13の6は3000 B.P.とれた古捕鯨文化とされた図13の1とも形態的に近いものである。より大型であるが、チュクチ半島の図13の7と8も含め、これら銚頭を同系統とし、およそ3000 B.P.以前にはベーリング海峡兩岸に広がっていたとすることが可能であろう。さらにそうした雌型銚頭が4000 B.P.頃とされるデンビー文化段階にまで遡る可能性も考えるべきであろう。またアラスカ太平洋岸6000 B.P. オーシャン・ベイ期における雄型銚頭を使用しての海獣猟がなされていたとした。こうしたオーシャン・ベイ伝統における海獣猟の存在を重視するなら、その発展として雌型銚頭の出現とそれを「武器」としてのベーリング海峡周辺さらにはカナダ以東へのデンビー文化の展開を想定することが可能であろう。

ただそうした雌型銚頭の系譜を単一のものと認めるとしても、紀元前後以降、すなわちベーリング海峡周辺でのオクヴィック文化成立以後、ベーリング海峡、北アラスカと南西アラスカ以南とは銚頭の展開において、それぞれに別の展開を見ることとなったとすることができる。それはまたそれぞれの地域への適応、地域性の成立ともされよう。既にふれた図16の1は南西アラスカのトギアック (Togiak) 川流域で採集されたものであるが、紀元前後とされる類似する銚頭がチャグヴァン (Chagvan) 湾から纏まった形で発見されている (Ross 1971: fig. 28)。当銚頭の網孔は体部を貫通しておらず、斜めに穿孔された孔が体中で結合するという独特の作りであり、ベーリング海峡周辺以北では決して見られない特徴を有するものである。

ただアラスカ沿岸におけるこうした南北差が存在するとしても、両地域の関係が途絶したものでなかったことも確かである。すなわち図17の1はポート＝モラー遺跡、図17の2はウムナック島の採集品である。これらに見られる円点文 (dot and circle design) あるいはコンパス文と称される文様を持つ雌型銚頭は南西アラスカ以南において決して多くはないが、時に発見されている。こうした文様は、明らかにベーリング海峡辺における古ベーリング海・ブヌーク両文化銚頭における文様 (図14の2と3参照) に関連するものである。

さらにこうした文様伝播例はその他にも知られる。図17の3に示した銚頭はセワード (Seward) 半島先端ウエールズ (Wales) 採集品であるが、その側面、網孔下方に刻線とそれに二本の短斜線が付された文様が見られる。端刃は金属製であり、時期的には18世紀以後のものである。フィッツヒュー等 (Fitzhugh and Kaplan 1982: 84) はこうした文様に注目し、氏族・家系マークと推測している。ただこうした文様が家系マークか否かは別として、同様な文様はノートン湾北岸から南西アラスカ沿岸クスコクウィン川口まで広がっている。図17の4と5はクスコクウィン川口南、プラチナム (Platinum) 出土品であり、4は同様な文様とその末端部側縁に沿って施され、5は単純化されて一本の線となっている。さらに図17の6はアリュシャン列島西端に近いアガツ (Agattu) 島で採集されたものである。その末端側縁にも刻線とそれに付された3本の短斜線あるいは

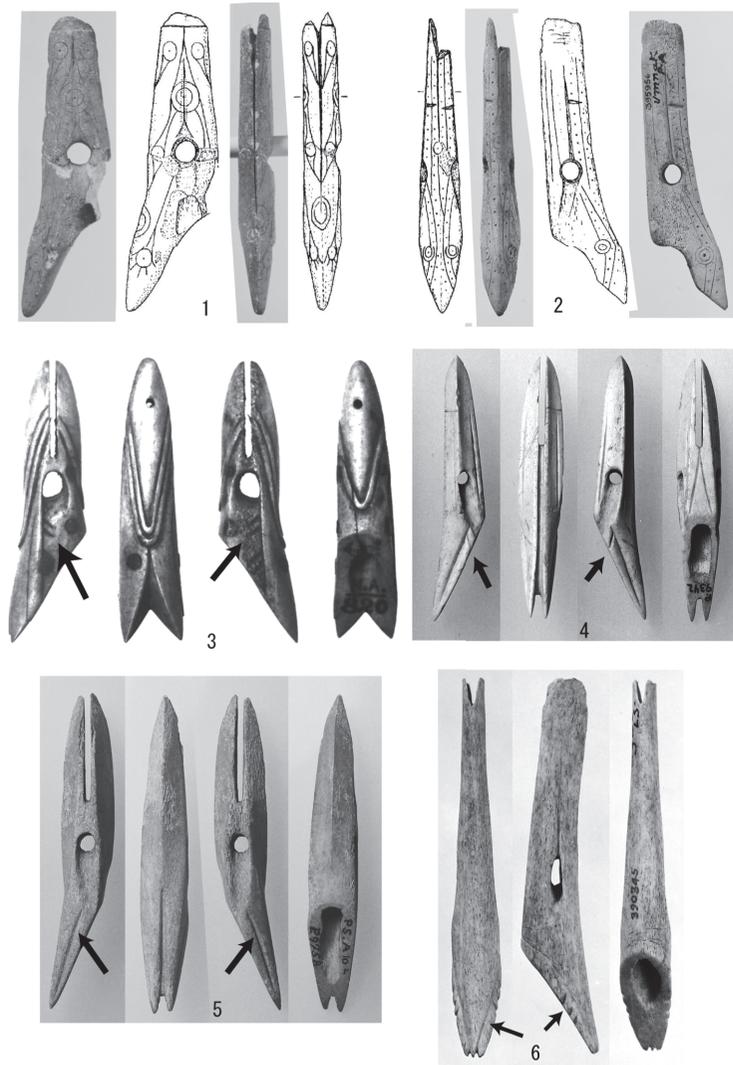


図17 アラスカにおける銛頭文様の伝播

1 ポート＝モーラー（長さ8.7cm） 2 ウムナック島（長さ8.9cm） 3 ウエールズ（長さ7.0cm） 4 プラチナム（長さ7.5cm） 5 プラチナム（長さ8.4cm） 6 アガッツ島（長さ10.8cm）

（出典：1 Port Moller 採集品，National Museum of Natural History Cat. No.367988，山浦1977：pl.10-3

2 Umnak 島採集品，National Museum of Natural History Cat. No.395956，山浦1977：pl.11-4

3 Wales 採集品，University of Pennsylvania, University Museum Cat. No.NA820，筆者撮影

4 Platinum 出土，National Museum of Denmark, Cat. No.P-9342, Larsen 1950，筆者撮影

5 Platinum 出土，National Museum of Denmark, Cat. No.P-9758, Larsen 1950，筆者撮影

6 Agattu 島採集品，National Museum of Natural History, Cat. No.390345，山浦1977：pl.13-3）

刻点が認められよう。それは明らかに図17の4と5と関連する文様である。すなわちこれらモチーフは同一であり，ただその施文位置が転化しただけと理解される。つまり家系マークとするより，装飾モチーフ，もちろんそこに何らかの神話の意味があるかもし

れないが、ともかくそうしたものとして考えた方が良いであろう。そしてこうした文様伝播の背景として、地域間すなわちアラスカからアリューシャンにわたる強い結びつき、具体的には結婚・交易さらには戦争といった連鎖の存在を想定すべきである。

3.4 カナダ北西海岸地域

当地域に居住する北西海岸インディアンにおいては一定時期に遡上する膨大なサケの捕獲・保存を基本とし、いわゆる「豊かな」階層化社会が成立したと理解されてきたわけである。もちろんそうした理解については種々の議論もあるが (Ames and Maschner 1999: 24), ともかく彼らの内でもラッコ、アザラシ類、クジラ類の猟がなされてきた。例えばトリングット (Tlingit) においては、雌型銚頭を使用してゴマフアザラシ、オットセイ、トド、ラッコ、イルカ類の猟がなされ、コディアック・エスキモー同様、雌型銚頭付きの弓矢でラッコ猟がなされた。またトド猟は「最も勇敢な者」によるとされていた (de Laguna 1990: 210)。ハイダ (Haida) でも同様な海獣猟がなされていた (Blackman 1990: 244)。さらにヌートカ (Nootka) におけるコククジラとザトウクジラの捕鯨が有名であるが (Huelsbeck 1988: 5), それ以外にもオットセイ、ゴマフアザラシ、ラッコ、トドの銚猟が知られていた (Arima and Dewhirst 1999: 395)。

ただしこうした民族誌に知られる生活が成立するには、当地域における完新世以降の大きな自然環境の変化を経て、始めて成立したとされる。すなわち最終氷期ウイスコンシン氷期に発達していたコルディレラ (Cordillera) 氷床が温暖化により縮小し、海水面の上昇が見られたが、図10に示すように一部地域では氷床の縮小に伴いアイソスタシー (isostasy), 地殻均衡現象が認められることとなる (米倉 2000: 118)。すなわちヘカト (Hecate) 海峡では13000 B.P.以後急激な海面上昇が確認されるが、9000 B.P.以降は下降することとなる。一方600km程北のアイシー (Icy) 海峡ではその反対に12000 B.P.以降の海面低下、すなわち陸地隆起が確認されるわけである。また図11に知られるように6000 B.P.までの高温期以後、氷河拡大期に入る。海岸線に沿って鬱蒼として広がる針葉樹林帯が現在の様相を呈するのは5000～3000 B.P.とされている (Ames and Maschner 1999: 51)。

当地域の考古学では、完新世における文化を大きく二分している。すなわち古期 (Archaic Period) と太平洋期 (Pacific Period) である。前者は10500～4400 B.C., 後者はそれ以降とされ、太平洋期を特徴付けるのは最終的には厚さ数メートルに達することとなる貝塚の形成、および大型住居の出現とされている (Ames and Maschner 1999: 87)。その開始期、つまり海洋資源への関心が、オーシャン・ベイ期とほぼ同時期である点は注目されよう。さらに太平洋期は3期に細分され、その前期 (4400-1800 B.C.) には雄型銚頭が発見され (Ames and Maschner 1999: 90), 中期 (1800 B.C.～A.D.200-500) から雌型銚頭が確認されている (Ames and Maschner 1999: 93)。

その雌型銛頭は基本的には民族誌に知られるものと同形態である。すなわち図18に示したものはヌートカに隣接するコースト＝セイリッシュ (Coast Salish) のチョウザメ漁用銛頭であるが (スチュアート 1987: 58-62), 基本的には捕鯨用も含め、北西インディアンにおける雌型銛頭は全て同形態のものである。すなわち大型のものは鹿角製のペン型のを二つ製作し、それを接合して使用されるが、小型のものは一素材から同形態のものが製作されている。ラッコ、アザラシ類、クジラ鯨だけでなく、サケ類や体長6mに達するチョウザメ (*Acipenser transmontanus*) (Hart 1980: 83) の漁にも使用されたわけである。こうした雌型銛頭の出現は太平洋期中期段階における漁撈技術の発展として理解されている (Ames and Maschner 1999: 93)。

こうした銛頭の考古資料としては北西海岸インディアンの居住する南東アラスカ地域 (Davis 1999: Fig.3-u・v・oo・pp), さらにコディアック島 (Heizer 1956: fig. 40) においても発見されている。またその南ではカリフォルニア州北西部にまで広がっている (Bennyhoff 1950: figs. 5・7)。同形態のものが変化することなく、長期にわたって存続、使用されたという点が当地域雌型銛頭の大きな特徴とされよう。その系譜については、コディアック島出土例に知られるようにエスキモー先史文化との関係も考えられるが、その解明には各地域における正確な年代付けが必要となろう¹⁷⁾。

当地域における海獣猟はあくまでサケ漁の補完的な生業とされる。ただヌートカヤマカ (Makah) におけるクジラ鯨は注目される場所であった (岸上 2014)。すなわちここでは捕鯨に関わるのは「貴族」に限られているという点から、単に生業としての捕鯨という点だけでなく、階層化社会の一側面として注目されてきたわけである (渡辺 1990: 25)。ここではそうした社会的意味合いについては触れないが、考古学的に見るなら、彼らにおける捕鯨の出現、すなわち雌型銛頭の出現という点からするなら、遡っても太平洋期中期1800 B.C.以降とされよう。

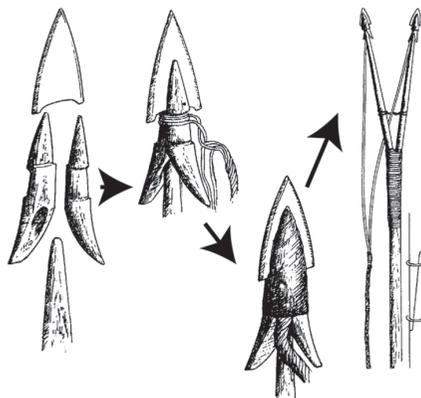


図18 ヌートカの雌型銛頭
(出典・スチュアート 1987: 58)

最後に、当地域の南方部の状況について触れておく。すなわち北西海岸インディアン
の銛頭と同型のは北西カリフォルニアまで分布している。オレゴン州でのそれはサ
ケ類やトドを対象として使用され (Lyman 1991: 211)、北カリフォルニアのトロワ
(Tolowa) ではトドあるいはアシカ猟で使用された (Gould 1978: 130)。これらは北西海
岸インディアン文化の周辺地域の海獣猟として理解されよう。

さらに南に向かうと、カリフォルニア州チュマッシュ (Chumash) においても海獣猟
が行なわれていたことが知られている (Grant 1978: 517)。その海域はラッコ、カリフォ
ルニアアシカ、キタゾウアザラシ (*Mirounga angustirostris*) さらにはコククジラ (*Eschrichtius
robustus*) の生息域であること良く知られたところである。19世紀初頭にはロシア人によ
ってラッコ猟の為に当地へ連れてこられたエスキモーの銛頭がそのサンニコラス (San
Nicholas) 島において発見されている (山浦 2004: 276)。ただチュマッシュには雌型銛
頭は知られておらず、その海獣猟については、また本論とは異なった視点からの研究課
題となろう (Altschul et al. 2002)。

4 まとめ

以上大きく4地域に分けて雌型銛頭の系譜、また海獣猟の展開を見てきた。考古学的
調査において地域的精粗があり、特にオホーツク海北岸に関しては、さらなる調査が待
たれる地域である。ここで巨視的に北太平洋沿岸における海獣猟の展開過程をまとめて
みることにしよう。

やはり注目されるのは極東、殊に北海道で確認される7000 B.P.に遡る雌型銛頭使用に
よる海獣猟の存在であろう。更新世最終末11000年前、短期の寒冷期ヤングドリアス
(Younger Dryas) 期を経て (米倉1995: 32)、完新世に入り、図6の「11」に示した気候
最適期・高温期に向かうこととなったわけである。こうした環境変化において極東地域
では、より豊かな植物相・動物相が出現し、さらに多種多様な河川・海洋生物を対象と
した漁撈活動も活発化したと推定される。そうした生業活動において多様な生物相を十
全に利用する方向へ進み、漁撈活動の一環として海獣猟が開始された可能性がある。
ただ北海道では、アラスカに知られるような雄型銛頭使用の海獣猟という段階は確認さ
れていない。「3.1.3 アムール川流域」で触れたが、雄型あるいは雌型銛頭使用による河
川・海岸部での大型魚漁という段階が海獣猟前段階としてあった可能性も考えられる。

一方カナダ北西海岸部においては、図10の海水面変動において触れたように、ベーリ
ンジアの消滅、氷河縮小による多様な局地的地殻変動が起こった。従ってそこでは各地
域、多様な適応が求められることになったであろう。もちろん海浜部での貝類、ウニ、
コンブ等の採集、さらには初期的な漁撈活動が試みられたであろう。ただ民族誌で注目
されるサケ類についても、その母川回帰という性格からするなら、果たして当時の程

度安定した食糧源であったか、という疑問も生じよう。ともかくアナングラ遺跡とその関連遺跡、カナダ北西海岸部の古期段階は不安定な状態であったのは確かである。そうした過程を経て、南アラスカにおける6000 B.P.のオーシャン・ベイ伝統、またカナダ北西海岸部における太平洋期の成立となった。縄文文化を含む太平洋西岸における定住化、海獣猟出現との時間差は、そうした完新世前半期、両地域の環境変化の相違に因るところが大きかったとされる。

さらにベーリング海やチュクチ海沿岸といった高緯度の地域に目を向けるなら、気候最適期・高温期には海水温も上昇し、当然冬期結氷域も北上していたであろう。またサケ類や海獣類の棲息域と回遊路も今日よりも高緯度であったと推定することは可能であろう。ただ当該期ベーリング海峡周辺における遺跡が少ないことは既述の通りである。その段階、サケ類を含む遡河魚の捕獲がなされたとしても、その漁撈期あるいは保存処理能力の問題もある。すなわち高緯度になるほど遡河サケ類の種類は減少し、またそれぞれの遡河期間は短くなる。また期間は短くなるが、一方では単位期間内の遡河魚量は多くなる (Schalk 1977: 222)。さらにその年毎の遡河量変動は高緯度になるほど、大きくなるという (Schalk 1977: 226)。従っていかにサケ類の遡河量が大きいにしろ、年毎の変動は大きく、またより短期間に、より集中的な作業が必要となってくる。民族誌からすると他生業たとえば夏期カリブー猟との調整が問題となろう。すなわちその温暖期がベーリング海峡周辺民にとってどの程度「最適期」であったのか、という疑問も生じる。

一方アリューシャン列島を含めアラスカ半島沿岸においては、オーシャン・ベイ伝統6000 B.P.頃には海獣猟が開始されることになったことは確かであろう。しかし、いかにしてこうした展開を見ることになったのか、という大きな問題が提起される。その背景としては、やはり高温期であるにしろ、当該域における陸獣相の貧困、殊に狩猟対象としての中型陸獣類の貧困が指摘されよう。例えば亜極北地域 (Subarctic) 狩猟民においては、その主要狩猟動物として、カリブーとヘラジカ (*Alces alces*) の二種が挙げられているにすぎない (Gillespie 1981: 15)。またミンク、ビーバー、キツネ等の小型獣が存在するとしても、それらは食糧源としては不十分である。またクマ類にしても、食糧としての量、その安定性は低いと言わざるをえない。カリブー以外、アラスカ海岸部における狩猟対象となる陸獣種の貧困さはやはり打ち消し難い問題であろう。そうした環境下、狩猟活動の延長として海獣猟の展開をみることになったと想定することが出来るのではなかろうか。さらに氷河拡大期に入った段階では高緯度住民にとって海獣猟、さらに狩猟具としての雌型銛頭は生存上、必須要件となったであろう。そうした段階を経てベーリング海峡周辺域における海獣猟の開始となろう、すなわち氷河拡大期、凡そ4000年前とされるデンビー文化の成立とその展開である。

デンビー文化以後、ノートン文化伝統とされる段階、3000 B.P.にはベーリング海から

チュクチ海沿岸において海獣猟を主要生業形態とする文化が成立した。ただ3500 B.P.における一時的な寒冷化・湿潤化が説かれており (Mann et al. 1998), 図10に見られるようにアイシー海峽においては3000 B.P.以後, 何回かの海水面変動が確認されている。そうした気候変動・寒冷化と関連して南アラスカの遺跡においても自然遺物としてホッキョクグマ, セイウチ, ワモンアザラシ等の骨が検出される遺跡が存在するという (イエスナー 2009: 53)。ともかくこうした気候変動を経験しながらも, 海獣狩猟民としての適応が進み, その対象獣もアザラシのみならず, セイウチさらにはクジラ類というように, その狩猟技術が発展することとなったことは確かである。そこでは個人猟から集団猟へという展開が見られ, 新たな生業=社会組織が形成されることになったとされる。

北太平洋沿岸域における海獣猟の展開を見てきたが, ベーリング海やチュクチ海沿岸部における海獣猟文化としてのエスキモー文化は, 人類の高緯度地域への適応における一回答であり, エクメーネ拡張の一端を担ったこととなる¹⁸⁾。さらにエスキモー海獣猟文化の成立が, 近隣民族, 海岸チュクチや海岸コリヤークの展開にも影響を与えた可能性がある。

謝辞・追記

退職後2年経つが, 未だ身の落ち着かない状況である。文献・抜刷り等の搜索に多大な時間を取られ, また多くの人々のお世話になった。次の人々には記して感謝したい (敬称略)。前田潮・木村英明・安斎正人・上奈穂美・木山克彦・福田正宏・三田良美

また, 拙稿投稿後, 北海道大学・高瀬克範氏からカムチャッカ関係の考古学報告等を送付頂いた。本論主旨と直接関連するところはないが, カムチャッカ考古学に関する貴重な研究である。ここに1点紹介することとしたい。

Katsunori Takase 2014 Radiocarbon Dating of Pottery from Karaga Bay Coast, Northern Kamchatka, Russia, *Journal of the Graduate School of Letters, Hokkaido University* 9: 1-27.

注

- 1) 銛・銛頭の構造等の詳細については山浦 (2004: 1-10) を参照されたい。
- 2) もちろん海獣類=海棲哺乳動物だけでなく, サケ類を含む大型魚漁, さらに南米では亀・ワニ猟に使用する民族例もある (Mason 1900: 217)。また陸獣猟での使用例もあり, 例えばフィリピン・ルソン島ネグリト系アガタ (Agta) においては, 野猪・鹿猟において弓矢先端に銛頭と同形態のものが装着されている (Griffin 1997: Figs. 3と4)。ただそれらは後述する雄型銛頭と同形である。また本論で扱う地域においても陸獣を対象として銛が使用された可能性がある。例えば北極海に面したエスキモーあるいは海岸チュクチの残した岩壁画 (その一部の捕鯨図は図4の6に示している) にはカヤックに乗船し, 渡河するトナカイの猟をする様子が描かれている (Диков 1971: 171; 前田 1987: 222)。ただそうした猟法は, 海獣猟から派生した可能性がある。

- 3) シベリアでも中石器時代からバイカル湖に陸封されたバイカルアザラシ (*Pusa sibirica*) 猟がなされていたが、そこでは雄型銆頭が知られるのみであった。ただし春・夏猟と想定されている(小畑 2001:124)。ちなみにジブラルタル海峡部の洞窟からは、111500 B.P.とされるネアンデルタール人のモンクアザラシ (*Monachus monachus*)・イルカ類の利用が明らかとなってきている。ただそれらは岩礁等での撲殺、また座礁したものとされている (Sabin 2005: 4)。
- 4) 当地域を含め日本列島における銆頭に関しては近年公刊された高橋 (2008) を参照されたい。また本論では考古資料を図示する際、本来なら原典報告書図版に遡って示すべきであるが、本論では集成・研究文献等からの再録が多い。ご了承いただきたい。
- 5) 縄文時代実年代については小林 (2008)・安斎 (2014) 等による。近年の年代測定法の進展により、各実年代については、その測定法を考慮して記載すべきであるが、本論は巨視的な論述であり、基本的に引用文献の記載をそのままの形で示すこととした。
- 6) 「ポストアイヌ期」とは擦文文化終末以後、16世紀文献資料の出現期までを考えている (山浦 2008 : 13)。当用語については、近年北海道考古学においても議論がある (小野 2014)。
- 7) もちろん当地域では江戸時代に「西海捕鯨」の展開が知られることとなる (中園 2012)。
- 8) 当地域の銆頭については山浦 (2004 : 21-26), 及び甲元 (1994) を参照されたい。
- 9) 石刃族関係の研究として (大貫・福田 (編) 2014) がある。そこでは北海道における「石刃族文化」の存在について否定的見解も見られる。ただ「石刃族」あるいは「銆頭」といった技術の系譜を大陸側に求めることは否定できないとされよう。
- 10) アメリカ考古学者は tradition という用語を多用するが、それを「伝統」として本論では翻訳・使用する。彼らの定義によれば、遺物・遺構の諸特徴が総体として長期にわたって存続する文化複合ということとなる (Wiley and Phillips 1970: 37)。ただしその「総体」あるいは「長期」ということ自体が問題となる。例えば彼らの用語法によれば、一般に我々の使用する「縄文文化」も、彼らの用語法によれば、「縄文 (土器) 伝統」と呼ぶこととなる。
- 11) そこでは4000 B.P.とされる2点の小型の開筒式銆頭が紹介されている。ただこれらの系譜としては、その南方、カナダ大西洋岸における「沿岸古期伝統」(Maritime Archaic Tradition) (7000-3500 B.P.) においても雌型銆頭が発見されており (Tuck 1976: Pl. 3; Wright 2006: figs. 5-3, 14-9), それとの関係も考えられる。
- 12) throwing board の訳である。日本考古学では一般に「投槍器」とされるが、本論では「投擲器」とする。
- 13) 「雌ラッコの肉はアザラシより美味であり、幼獣はラム肉に近い」という記載がある (Jochelson 1933: 39)。ただそれはベーリング探検隊員の意見であろう。
- 14) 当遺跡の報告において、その石器類に槍先あるいは鏃とされるような定形的なものは発見されていない。「石錘」も鳥猟用投石 (bola) の可能性がある。1点ランプとされるものが報告されているが、報告中では「ランプあるいは容器」とされている (Laughlin and Aigner 1966: 48)。
- 15) それ以前、すなわち12000年前以前、新大陸への人類最初期の移動ルートとして、アラスカ・カナダ太平洋岸に沿って南下したとする説もある。そうした説においては当然その段階から舟使用と海水面漁業の開始が説かれることとなる。
- 16) オーシャン=ベイ伝統がアリューシャン列島まで広がっていたか否か、という点については議論がある。列島西方へ拡大時期についてはフォックス (Fox) 諸島へ早くとも3000 bc, ラット (Rat) 諸島へ1000 bc, ニア (Near) 諸島へは600 bc という年代が与えられている (Dumond 1977: 77)。ちなみに「bc」はAMS年代測定法以前の測定結果をそのまま西暦に換算したものである。また雄型銆頭における類似性からボイスマン遺跡とオーシャン・ベイ伝統との関係を考える研

究者もいるが（イエスナー 2009：55），その類似点とされる属性は余に一般であり，関係を説くことは問題である。

- 17) 渡辺（1992: 95）はアリューシャン列島経由の文化伝播の一証左として，北西海岸部銆頭の「双頭回転式銆先」（図18右端）と，アイスにおける一部 *kite* における同様な使用法との関連を指摘したことがある。しかしそうした使用法は，交流を語るには余に一般的な類似性であろう。
- 18) 近年の調査では，北緯76°，シベリア北極海岸の北，ノボシビルスク諸島から8000年前に遡る遺跡が調査されているが，ホッキョクグマ・ホッキョクギツネ等の出土であり，海獣類はないようである（木村英明・木村アヤ子 2013: 177）。ベーリンジア住民に近い人々の末裔か，あるいは人類史上における一つの「冒険」や「エピソード」として終わるのかもしれない。

引用・参考文献

（和文）

天野哲也

2008 『古代の海洋民 オホーツク人の世界』東京：雄山閣。

安斎正人

2014 「縄文時代の構造変動」安斎正人・福田正宏編『完新世の気候変動と縄文文化の変化』pp.57-80, 山形：東北芸術工科大学東北文化研究センター。

イエスナー D.

2009 「貝類，アザラシ，そしてサケ 北太平洋における海洋適応の動物考古学的展望」岡庭義行訳，谷本一之・井上紘一編『「渡鴉のアーチ」（1903-2002）— ジェサップ北太平洋調査を追試検討する』（国立民族学博物館調査報告82）pp.45-59, 大阪：国立民族学博物館。

榎森 進

1999 「近世初期の北奥社会とオットセイ」渡辺信夫編『東北の交流史』pp.69-84, 秋田：無明舎出版。

大場忠道

1989 「日本海の環境変化」『科学』59（10）：672-681。

大貫良夫

2011 「アムール編目土器の終焉と周辺」『東京大学常呂実習施設研究報告』9：243-264。

大貫良夫・福田正宏共編

2014 『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明「石刃族文化」に関する新たな調査研究』東京：東京大学大学院。

大塚和義

1966 「抉入離頭銆」『物質文化』9：33-46。

1994 「ニプフのアザラシ猟と送り儀礼」『国立民族学博物館研究報告』19(4)：543-585。

岡田宏明・岡田敦子

2006 「ポート・モラー」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp.196-212, 札幌：北海道大学出版会。

小野哲也

2014 「アイス文化期」『北海道考古学』50：113-122。

- 小野有五・五十嵐八枝子
1991 『北海道の自然史』札幌：北海道大学図書刊行会。
- 小畑弘己
2001 『シベリア先史考古学』福岡：中国書店。
- 金子浩昌
1980 「銚頭の変遷」『歴史公論』6(5)：113-121。
- 金子浩昌・忍沢成視
1986a 『骨角器の研究 縄文篇 I』東京：慶友社。
1986b 『骨角器の研究 縄文篇 II』東京：慶友社。
- 川道 寛
2007 「つぐめのはな遺跡のクジラ漁」『縄文時代の考古学』5(なりわい—食料生産の技術) pp.162-169, 東京：同成社。
- 金 建洙
2006 「韓半島における先史・古代の捕鯨業」『日本捕鯨の黎明期と壱岐』pp. 14-17, 壱岐市：一支國研究会。
- 木村英明・木村アヤ子編訳
2013 『氷河期の極北に挑むホモ・サピエンス』東京：雄山閣。
- 木村幾多郎
1994 「北部九州の狩猟・漁撈活動」『九州の貝塚 貝塚が語る縄文人の生活』pp. 14-23, 北九州：北九州市立考古博物館。
- 菊池俊彦
1995 『北東アジア古代文化の研究』札幌：北海道大学図書刊行会。
- 岸上伸啓
2012 『北極海の狩人たち—クジラとイヌピアットの人々』札幌：風土デザイン研究所。
2014 「カナダにおける北西海岸先住民ヌーチャヌルスの捕鯨と先住権」『北海道北方民族博物館研究紀要』23：23-34。
- 木山克彦
2012 「紀元前後～7世紀における極東・サハリン・北海道北部の考古学的様相」加藤博文・鈴木建治編『新しいアイヌ史の構築』(先史編・古代編・中世編) pp.38-49, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
- 河仁秀
2007 『東三洞貝塚浄化地域発掘調査報告書』韓国：福泉博物館。
- 河仁秀・西本豊弘・金憲爽・新美倫子・金殷英・上奈穂美
2011 『東三洞貝塚浄化地域 動物遺体 研究報告』韓国：福泉博物館。
- 小林謙一
2008 「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学2(歴史のものさし)』pp. 257-269, 東京：同成社。
- 小林青樹
2009 「海人の性格—アワビオコシと銚頭」『弥生時代の考古学 5(食糧の獲得と生産)』pp. 170-185, 東京：同成社。
- 甲元真之
1994 「東北アジアの先史時代漁撈」『熊本大学文学部論叢』45(史学篇)：135-158。

- クレイノヴィチ E.
1993 『サハリン・アムール民族誌』 榎本哲訳, 東京: 法政大学出版局。
- 佐々木利和
1980 「噴火湾 Ainu のおっとせい猟について」『民族学研究』 44(3): 403-413。
- スチュアート ヒラリー
1987 『海と川のインディアン』 木村英明・木村アヤ子訳, 東京: 雄山閣。
- 田畑忠司
1978 『流水』(北海道の自然 7) 札幌: 北海道新聞社。
- 高橋 健
2008 『日本列島における銆猟の考古学的研究』 札幌: 北海道出版企画センター。
- 中園成生
2012 「日本における捕鯨の歴史的概要—漁法を中心に」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』 pp.154-171, 東京: 成山堂書店。
- 新美倫子
2013 「縄文時代の北海道における海獣狩猟の再検討」『動物考古学』 30: 19-32。
- 西村三郎
1980 『日本海の誕生』 東京: 築地書館。
- 西脇昌治
1965 『鯨類・鰭脚類』 東京: 東京大学出版会。
- 福田正宏
2007 『極東ロシアの先史文化と北海道』 札幌: 北海道出版企画センター。
- 福田正己
1995 「シベリアとアラスカの自然」米倉伸之編『モンゴロイドの地球4 極北の旅人』 東京: 東京大学出版会。
- 朴 九秉
2004 「盤亀台岩刻画に見る鯨類と捕鯨」日本捕鯨研究所編『第二回 日本伝統捕鯨地域サミットの記録』 pp.39-67, 東京: 日本鯨類研究所。
- 前田 潮
1987 『北方狩猟民の考古学』 東京: 同成社。
2002 『オホーツクの考古学』 東京: 同成社。
2011 「サハリン東タライカ貝塚出土の銆頭」『物質文化』 90: 33-47。
- 松島義章・前田保夫
1985 『先史時代の自然環境』 東京: 東京書籍。
- 宮岡伯人
1987 『エスキモー—極北の文化史』 東京: 岩波新書。
- 森 為三
1939 「原色満州有用淡水魚類図説」『満鉄調査部産業調査資料50』 南満州鉄道株式会社。
- 山浦 清
1977 『南西アラスカ・アリューシャン列島における回転式銆頭の型式学的研究』 根室: 北地文化研究会。
1980 「北西太平洋沿岸地域における回転式銆頭の系統問題」『物質文化』 35: 1-19。
1987 「縄文時代の漁撈活動」大林太良編『日本の古代』 8 (海人の伝統) pp.87-126, 東京: 中央

- 公論社。
- 1993 「縄文人の四季」木下正史・石上英一編『新版 日本の古代10 (古代資料研究の方法)』pp. 27-46, 東京:角川書店。
- 1995 「ベーリングの先史人類」米倉伸之編『モンゴロイドの地球4 極北の旅人』東京:東京大学出版会。
- 2000 「縄縄文から擦文文化成立期にかけての北海道・本州間の交流」小川英文編『現代考古学』(5 交流の考古学) pp. 73-94, 東京:朝倉書店。
- 2004 『北方狩猟・漁撈民の考古学』東京:同成社。
- 2005 「東北地方太平洋岸弥生時代以降における漁撈民の多様化」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』pp. 285-298, 東京:六一書房。
- 2006 「西北九州における雌型銆頭の伝統」藤本強編『生業の考古学』pp. 129-148, 東京:同成社。
- 2008 「プロト=アイヌ期における銆頭の変遷とその背景」『北海道考古学』44:1-20。
- 2010 「バーナーク文化成立過程についての基礎的考察」菊池徹夫編『比較考古学の新地平』pp. 795-804, 東京:同成社。
- 2011 「オクヴィック文化・古ベーリング海文化における銆頭の型式学的研究」『物質文化』90:13-32。
- 2012 「考古学から見た日本列島における捕鯨」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp.137-153, 東京:成山堂書店。
- 山浦清・高島孝宗
- 2013 「礼文島オシヨンナイ砂丘遺跡採集の一銆頭」『枝幸研究』4:21-26。
- 米倉伸之
- 1995 「アメリカ大陸の自然」大貫良夫編『モンゴロイドの地球5 最初のアメリカ人』pp. 1-37, 東京:東京大学出版会。
- 2000 『環太平洋の自然誌』東京:古今書院。
- 米田 譲
- 2006 「炭素・窒素同位体比から見たオホーツク文化の食生態」『骨から探るオホーツク人の生活とルーツシンポジウム』札幌:北海道大学総合博物館。
- ラフリン, ウィリアム
- 1986 『極北の海洋民 アリュート民族』スチュアートヘンリ訳, 東京:六興出版。
- 凌純聲
- 1934a 『松花江下游の哲族』国立中央研究院歴史語言研究所 単刊甲種14 (上册) 南京。
- 1934b 『松花江下游の哲族』国立中央研究院歴史語言研究所 単刊甲種14 (図版) 南京。
- レベジンツェフ, A.
- 2012 「オホーツク海をはさんだ南北両岸の海洋文化の関係」(天野哲也・垣内あと訳)『北海道考古学』48:69-81。
- ワークマン, ウィリアム
- 2006 「先史期における北太平洋沿岸地域海獣類」(角達之助訳), 北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 34-64, 札幌:北海道大学出版会。
- 和田一雄・伊藤徹魯編
- 1994 『鰭脚類—アシカ・アザラシの自然史』東京:東京大学出版会。
- 渡辺 仁
- 1990 『縄文式階層化社会』東京:六興出版。

- 1992 「北洋沿岸文化—狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』pp. 67-107, 東京：三省堂。
- 渡辺 誠
1973 『縄文時代の漁業』東京：雄山閣。
- 渡部 裕
2012 「カムチャッカ半島沿岸先住民のシロイルカ猟について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 122-136, 東京：成山堂。
- (欧文)
- Ackerman, Robert
1998 Early Maritime Traditions in the Bering, Chukchi and East Siberian Seas, *Arctic Anthropology* 35 (1) : 247-262.
- Aikens, C. Melvin and Takeru Akazawa
1996 The Pleistocene-Holocene Transition in Japan and Adjacent Northeast Asia: Climate and Biotic Change, Broad-Spectrum Diet, Pottery, and Sedentism. In L.G. Strauss, B. G. Eriksen, J. M. Erlandson, and D. R. Yesner (ed.) *Humans at the End of the Ice Age: The Archaeology of the Pleistocene-Holocene Transition*, pp. 215-228. New York: Plenum Press.
- Ames, Kenneth M. and H. D. Maschner
1990 *Peoples of the Northwest Coast, Their Archaeology and Prehistory*. London: Thames and Hudson.
- Anderson, Douglas
1978 Continuity and Change in the Prehistoric Record from North Alaska. In Y. Kotani and W. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies No. 4), pp. 233-251. Osaka: National Museum of Ethnology.
1984 Prehistory of North Alaska, In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic), pp. 80-93. Washington DC: Smithsonian Institution.
- Antropova, V. V.
1964a The Koryaks. In M. G. Levin, and L. P. Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*, pp. 851-875. Chicago: The University of Chicago Press.
1964b The Itel'mens. In Levin M. G. and L. P. Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*, pp. 876-883. Chicago: The University of Chicago Press.
- Antropova, V. V. and V. G. Kuznetsova
1964 The Chukchi. In M. G. Levin and L. P. Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*, pp. 799-835. Chicago: The University of Chicago Press.
- Arima, Eugene and John Dewhurst
1990 *Nootkan of Vancouver Island*. In W. Suttles (ed.) *Handbook of North America Indians* 7 (Northwest Coast), pp. 391-411. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Altschul, Jeffrey H. and Donn R. Grenda (eds)
2002 *Islanders and Mainlanders, Prehistoric Context for the Southern California Bight*. Tucson, Arizona: SRI Press.
- Bennyhoff, J. A.
1950 Californian Fish Spears and Harpoons. *Anthropological Records* 9 (4): 295-337.

- Birket-Smith, Kaj
 1941 Early Collections from the Pacific Eskimo. *Ethnographical Studies* 1, pp. 121–163. Copenhagen: National Museum.
- Black, Linda
 1973 The Nivkh (Gilyak) of Sakhalin and the Lower Amur. *Arctic Anthropology* 10: 1–110.
- Burns, John J.
 1981 Bearded Seal: *Erignathus barbatus*. In S. Ridgway, and R. Harrison (eds.) *Handbooks of Marine Mammals* 2 (Seals), pp. 145–170. New York: Academic Press.
- Clark, Donald
 1975 Technological Continuity and Change within a Persistent Maritime Adaptation: Kodiak Island, Alaska. In W. Fitzhugh (ed.) *Prehistoric Maritime Adaptation of the Circumpolar Zone*, pp. 203–228. The Hague: De Gruyter Mouton.
 1984 Pacific Eskimo: Historical Ethnography. In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic), pp. 195–197. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Clark, Gerald H.
 1977 *Archaeology on the Alaskan Peninsula: The Coast of Shelikof Strait, 1963–1965* (University of Oregon Anthropological Papers No. 13). Oregon: University of Oregon.
- Clark, Graham
 1952 *Prehistoric Europe: the Economic Basis*. London: Methuen and Co.
- Collins, Henry B.
 1937 *The Archaeology of St. Lawrence Island, Alaska* (Smithsonian Miscellaneous Collections Vol. 96 No. 1). Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- De Laguna, Fredelica
 1934 *The Archaeology of Cook Inlet, Alaska*. Philadelphia: The University Museum, University of Pennsylvania.
 1956 *Chugach Prehistory: The Archaeology of Prince William Sound, Alaska*. (University of Washington Publications in Anthropology 8). Seattle, WA: University of Washington Press.
 1990 Tlingit. In W. Suttles (ed.) *Handbook of North American Indians* 7 (Arctic), pp. 203–228. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Dikov, N. and E. Titov
 1984 Problems of the Stratification and Periodization of the Ushki Sites. *Arctic Anthropology* 21 (2): 69–80.
- Dixon, John H.
 2003 Environment and Environmental Change in the Western Arctic and Subarctic: Implications for Whaling. In A. McCartney (ed.) *Indigenous Ways to the Present: Native Whaling in the Western Arctic*, pp.1–24. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press.
- Dumond, Don E.
 1978 A Chronology of Native Alaskan Subsistence Systems, In Kotani, Y. and W. Workman (eds.) *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp.23–47. Osaka: National Museum of Ethnology.
 1998 Maritime Adaptation on the Northern Alaska Peninsular. *Arctic Anthropology* 35(1): 187–203.

- Fitzhugh, Ben
 2003 *The Evolution of Complex Hunter-Gatherers, Archaeological Evidence from the North Pacific*. Norwell, MA: Kluwer Academic Publisher.
- Fitzhugh, William and Aron Crowell
 1988 *Crossroads of Continents*. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Fitzhugh, William and Susan Kaplan
 1982 *Inua, Spirit of the Bering Sea Eskimo*. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Ford, James
 1959 *Eskimo Prehistory in the Vicinity of Point Barrow, Alaska* (Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 47 (1)). New York: American Museum of Natural History.
- Giddings, James L.
 1964 *The Archaeology of Cape Denbigh*. Rhode Island: Brown University Press.
- Giddings, James L. and Douglas Anderson
 1986 *Beach Archaeology of Cape Krusenstern, Eskimo and Pre-Eskimo Settlements around Kotzebue Sound, Alaska* (Archaeology 20). Washington DC: National Park Service, U.S. Department of the Interior.
- Gillespie, Beryl C.
 1982 Major Fauna in the Traditional Economy, In J. Helm (ed.) *Handbook of the North American Indians*, 6 (Subarctic), pp. 15-18. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Grand, Campbell
 1978 Eastern Coastal Chumash, In R. Heizer (ed.) *Handbook of the North American Indians* 8 (California), pp. 509-519. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Griffin, P. Bion
 1997 Technology and Variation in Arrow Design among the Agta of Northeastern Luzon. In H. Knecht (ed.) *Projectile Technology*, pp.267-286. New York and London: Penum Press.
- Hart, John L.
 1973 *Pacific Fishes of Canada*. Ottawa: Fisheries Research Board of Canada.
- Heizer, Robert
 1943 *Aconite Poison Whaling in Asia and America: An Aleutian Transfer to the New World* (Anthropological Papers 24, Bureau of American Ethnology 133). Washington DC: Smithsonian Institution.
 1956 Archaeology of the Uyak Site, Kodiak Island, Alaska. *Anthropological Records* 17(1).
- Ivanov, S. V., M. G. Levin, and A. V. Smolyak
 1964 The Nivkhi. In M. G. Levin and L.P. Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*, pp. 767-787. Chicago: The University of Chicago Press.
- Jochelson, Waldemar
 1908 The Koryak. *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol.6, Part 2.
 1928 *Archaeological Investigations in Kamchatka* (Carnegie Institute of Washington Publication No.388).
 1933 *History, Ethnology and Anthropology of the Aleut* (Carnegie Institute of Washington Publication No.432).
- Krasheninnikov, Stepan P.
 1972(1755) *Explorations of Kamchatka.*, translated by E.A.P. Crownhart-Vaughan, Eugene: Oregon Historical Society.

- Krupnik, Igor
 1993 *Arctic Adaptation, Native Whalers and Reindeer Herders of Northern Eurasia*. Lebanon, NH: University Press of New England.
- Lantis, Margaret
 1984a Aleut. In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic), pp. 161-118. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
 1984b Nunivak Eskimo. In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic), pp. 209-223. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Laughlin, William and Jean Aigner
 1966 Preliminary Analysis of the Anangula Unifacial Core and Blade Industry. *Arctic Anthropology* 3 (2) : 41-56.
- Larsen, Helge
 1950 Archaeological Investigations in Southwestern Alaska. *American Antiquity* 15 (3) : 177-186.
- Lebedintsev, A.
 1998 Maritime Cultures of the North Coast of the Sea of Okhotsk. *Arctic Anthropology* 35 (1) : 296-320.
- Leroi-Gouhran, Andre
 1946 *Archéologie du Pacifique-Nord*. Paris: Travaux et Mémoires de L' institute d' Ethnologie.
- Lyman, R. Lee
 1991 *Prehistory of the Oregon Coast: The Effects of Excavation Strategies and Assemblage Size on Archaeological Inquiry*. New York: Academic Press.
- Mann, D, A. Crowell, T. Hamilton and B. Finney
 1998 Holocene Geologic and Climatic History around the Gulf of Alaska. *Arctic Anthropology* 35 (1) : 112-131.
- Mason, Otis
 1902 Aboriginal American Harpoons; A Study in Ethnic Distribution and Invention. *Annual Report of the United States National Museum*, pp. 189-304.
- Mathiassen, Therkel
 1927 *Archaeology of the Central Eskimos* (Report of the Fifth Thule Expedition 1921-24, Vol.6, No.2). Copenhagen.
- Nowak, Michael
 1982 The Norton Period of Nunivak Island; Internal Change and External Influence. *Arctic Anthropology* 19 (2) : 75-92.
- Okada, H., A. Okada, and Y. Kotani
 1979 *The Hot Springs Village Site* (3), *Preliminary Report of the 1977 Excavations at Port Moller, Alaska*. Sapporo: The Institute of the Study of North Eurasian Cultures, Faculty of Letters, Hokkaido University.
- Okladnikov, A.
 1965 *The Soviet Far East in Antiquity: An Archaeological and Historical Study of the Maritime Region of the U.S.S.R*. In Henry N. Michael (ed.) *Arctic Institute of North America Anthropology of the North: Translations from Russian Sources No.6*, Toronto: University of Toronto Press.

- Oswald, Wendell H.
 1967 *Alaskan Eskimos*. San Francisco: Chandler Publishing Co.
 1973 *Habitat and Technology; the Evolution of Hunting*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Rainey, Froelick
 1947 The Whale Hunters of Tigara. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 41 (2) : 231-283.
- Renker, Ann M. and Eruna Gunther
 1990 Makah. In W. Suttles (ed.) *Handbook of North American Indians* 7 (Northwest Coast), pp. 422-430. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Ross, Richard E.
 1971 *The Cultural Sequence at Chagvan Bay, Alaska: A Matrix Analysis*. Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, Washington State University, Pullman.
- Sabin, Richard
 2005 From the Palaeolithic to the Present-Day: The Research Value of Marine Remains from Archaeological Contexts and the Uses of Contemporary Museum Reference Collections. In Monks, G. (ed.) *The Exploitation and Cultural Importance of Sea Mammals*, pp. 1-5. Oxford: Oxbow Books.
- Tuck, James A.
 1976 *Newfoundland and Labrador Prehistory*. Ottawa: National Museum of Man.
- VanStone, James W.
 1984 Mainland Southwest Alaska Eskimo. In D. Damas (ed.) *Handbook of North American Indians* 5 (Arctic), pp. 205-242. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Yamaura, Kiyoshi
 1979 On the Origins of the Thule Culture as seen from the Studies of Toggle Harpoon Heads. In A. McCartney (ed.) *Thule Eskimo Culture: An Anthropological Retrospective* (Archaeological Survey of Canada, Paper No. 88), pp.474-484. Ottawa: National Museum of Canada.
 1998 The Sea Mammal Hunting Cultures of the Okhotsk Sea with Special Reference to Hokkaido Prehistory. *Arctic Anthropology* 35 (1) : 321-334.
- Willey, Gordon and Philip Phillips
 1970 *Method and Theory in American Archaeology*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Wright, J.V.
 2006 *A History of the Native People of Canada* Vol. 1 (Mercury Series, Archaeological Papers 152). Ottawa: Canadian Museum of Civilization.
- (露文)
- Васильевский, П. И.
 1971 Происхождение и Древняя Культура. Новосибирск: Коряков.
- Вострецов, Ю. Е.
 1998 Первые Рыболовы в Заливе Петра, Владивосток; Великого.
- Диков Н. Н.
 1971 Наскальные Загадки Древней Чукотки (Петроглифы Пегтымеля). Москва: Издательство Наука.

Лебединцев,

1990 Древние Приморские Культуры Северо-Западного Приохотья. Ленинград: Издательство Наука.

Таксами, Ч.М.

1975 *Основные Проблемы Этнографии и Истории Нивхов*. Ленинград: Издательство.